

社会主义中国の宗教政策

抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』――

永井政之

はじめに

この小論は、標題にも掲げたように、一九八四年四月、上海社会科学院より刊行された『中国社会主义時期的宗教問題』の部分訳である。

当該の書については、本文中においてふれることもあるうし、また別の機会において述べる予定があるので、詳しくは述べないが、全体の内容を推測する便を考えて、とりあえずその目次を記しておこう。

這本書的由來――中国社会主义時期的宗教問題▽前言 羅竹風

第一章 緒論

第一節 各大宗教的歴史源流

第二節 宗教对我国文化的影响

第三節 我国宗教的歴史特点

第四節 解放前夕宗教的状况

第三章 建国以後宗教状況的根本變化

第一節 各宗教組織の政局状況の變化
第二節 宗教界人士思想面貌の變化
第三節 宗教思想方面的變化

第四節 根本变化の深遠意義

第四章 宗教長期存在的原因

第一節 宗教伝統的影響
第二節 社会原因

第三節 心理因素

第四節 宗教存在的長期性是多種原因互相作用的結果

第五章 宗教和社会主義社会相協調の問題

第一節 協調的根拠和含義
第二節 協調的条件和表現

第三節 不断克服不協調現象

第六章 宗教信仰自由政策

第一節 宗教政策的理論根拠和基本内容

第二節 宗教政策貫徹執行情況的回顧

第七章 結束語

附錄

邵県去來

關於福建省佛教寺廟開展生產勞動情況的調查

部分佛教青年的信教原因初析

四川青城山道教現狀

上海某街道退休職工信仰基督教情況的調查

長白山下的教会

青浦縣漁民教徒宗教信仰狀況初探

新疆伊斯蘭教與我國社會主義實踐相適應的問題

從某地基督教的發展看宗教生長的土壤

後記

本論で抄訳の対象としたのは、羅竹風氏の前言と第一章の緒論、付録として付された九編の調査結果のうち、仏教等に關係する三編である。前言を認めた主編者の羅竹風氏は、現在七八歳、北平大学の中文系を卒業ののち、一九四九年に上海市の宗教局局長、一九五九年に上海社会科学聯合会主席を務められ現在に至っていると聞く。

ところで一九六五年一一月に始まる所謂の文化大革命は一九七六年の周恩来、朱德、毛澤東という、いわば新生中国の柱の死、さらに一九七七年七月の四人組（江青・王洪文・張春橋・姚文元）の党籍剥奪と党内外の職からの解任によつてそ

の終焉を迎えた。その歴史的評価についての結論も一応は出た。以後の全国人民代表大会、あるいは中国共産黨の活動は、おおまかに言うなら、一方に四人組批判、いま一方に立ち遅れた経済などいかに回復発展させるかに、その努力を払ってきたものとみてよい。いわゆる農業・工業・国防・科学技術の面の四つの現代化は、後者の目ざすところを端的に表現したものである。しかも現代化がはかられるのは、右の四つに限らない。今、宗教や哲学など、文化の面での全人代第五期第一回会議（七八・二・二六）の報告をみておこう。

全国における哲学・社会科学発展計画の作成にとりくみ、哲学、経済学、政治学、軍事学、法学、歴史学、教育学、文学・芸術理論、言語学、民族学、宗教学などの研究を大いに発展させるべきである。思想理論戦線の同志たちは、マルクス主義の哲学、社会科学の普及と発展に寄与するよう努力すべきである。
〔新中国年鑑〕一九七九年版、p.182)

本書がしばしば言及する第一二期三中全会の公報（七八・一二・二二）は、主として経済面での現代化建設を強調する点で、新中国の歴史の中でも特に大きな意味を持つ。その中でも

会議は、全党的同志と全人民がマルクス・レーニン主義、毛澤東思想の導きのもとに、思想を解放し、新しい状況、新しい事物、新しい問題の研究につとめ、实事求是、すべてを實際から出発させる。理論と実際の結合という原則を堅持してのみ、わ

が党は活動の中心の転換を順調に実現できるのであり、四つの現代化実現の具体的な過程、方針、方法、措置を正しく解決し、生産力の急速な発展に照応しない生産関係と上部構造を正しく改革することができるるのである。

(同書、p. 219)

としているのは、本書刊行の背景の一端を示したものと言えよう。ちなみに「新中国年鑑」一九七九年版は、

総会のコミュニケによれば、中央工作会议と三中全との全過程において、参加者はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を踏まえ、思想を解放して思うままに発言し、党内民主主義と△实事求是△、大衆路線、批判と自己批判という党のすぐれた作風とを十分に回復し、発揚した。

(同書、p. 88)

としている。当時の主席は華国鋒であり、鄧小平路線が定着するには、まだしばらくの時間が必要であるが、いずれにせよ、三中全会が自由化への転機となつたことは理解できる。

もちろんその転機は、三中全会の時に突然訪れたものでは決してなく、すでに文革後期の七七年五月の中国科学院から哲学社会科学部の独立、中国社会科学院の成立はその証左となるであろう。当面の課題からすれば、上海社会科学院の再開は七八年一〇月であるから、これも三中全会そのものよりは早いこととなる。

ところで羅氏の前言は、すべての研究は「实事求是」から

出発しなくてはならぬことを強調しているが、付録の部分は、まさにそのような研究方法論を裏付けたものといえる。フィールドワークを基礎とする宗教関係の論文は、今日の日本では、特に目新しいものではない。しかし中国の場合、特に宗教の研究にあたって、このような方法がとられた例はたぶんすくないものに思われるし、なによりそれが、上海市の社会科学院——就中、宗教研究所のメンバーを中心に——と

いう公的な機関によってなされたところに大きな意味を見出だす必要があろう。それは解放以後の中国において宗教が論じられる時、多くの場合は、宗教と迷信を一しょくたにしたうえで、宗教の存在を全く認めないか、あるいは認めたとしても少数民族による極めて限定的なものとする傾向のみが強かつたからである。そこには当然、中国の現在の政治体制を歴史の流れの中でどう評価するかという問題とがかかわってくる。解放闘争、文化大革命、開放政策という政治の流れは、一般の国民の宗教にたいする意識にも大きな影響を与えてきたであろうことは、容易に想像ができる。それらの複雑な流れは、外国の研究者にとってはなかなか直接に把握しづらい面を持つ。その意味で本書の刊行は、常に背景にある中國の学問研究のもつ政治性を無視しえないものの、解放後の中国の、宗教研究書が固有に持っていた、有神論と無神論との比較検討——結論はすでに明らかである——あるいは原典

の主旨をまったく無視した牽強附会的な解釈などの研究態度が転回しつつあることを示すものとして、画期的な成果と評価してよいのではあるまい。ちなみに、本書の翻訳は、駒沢大学による昭和六三年度、在外研究員として半年間上海社

会科学院に滞在した時点よりはじめたもので、未だすべて完了しているわけではない。また筆者の拙訳を叱正下された芸芸大学大学院何平華女史、内山書店三浦勝利氏に謝意を捧げたい。

△本文△

本書の由来——『中国社会主義時期の宗教問題』まえがき

羅竹風

ある一つの物事に対するとき、事実に基づいて出発せず、概念から概念にわたり、曖昧かつ抽象的に論断すると、結局のところ誰でも「隔離搔痒」の嫌いを免れがたいものとなってしまう。宗教についても同じことである。

マルクスは、人類社会に階級の存在と階級間の闘争のあることを発見したのが、彼の功績でなくて、階級間の闘争が、必然的に無産階級を導きだすと論証したことが、彼の新しい貢献であるといつている。

宗教についての論述では、当時キリスト教が、支配的地位を占めていたドイツやヨーロッパの情況から出発したが、主要なことは、マルクスが無産階級が緊密に団結して、現世において、自らの生活を改善することを勝ち取るべきであると特に強調した点であり、宗教信仰への意見のわかれは二の次だったことである。レーニンが提案したのは、宗教信仰を公民の私事に変えたこと、つまり政権と宗教の分離、宗教を信ずるか信じないかを、すべて個人の自由な選択によると指摘したことである。彼もまたロシアの情況にもとづいて述べたのである。

いかなる事物も、すべてその本来の姿に立ちかえらなくてはならないが、宗教についてもまた例外ではない。人々の科学文化の水準を高めれば、宗教信仰を消しきることができると考える「文化論」が、宗教信仰といふこの複雑な現象を完全に解釈できとはいひないし、階級がなくなれば、宗教も自ずと消えるはずだと主張する「階級論」が、すべてをひっくりくることもできない。なぜなら、搾取階級が基本的には消滅したはずの社会主義社会において、なお宗教を信じている人がいるからである。

人類はすでに宇宙時代に入った。しかしアメリカのある宇宙飛行士は、宇宙にいたときに、逆に神の創造の偉大な不思議さ

に感動し、そのためより篤く神を信じて疑わなくなつた。神が世界を創つたという神話は、すでに科学に否定されるところではあるが、どうして、科学者的一部が、人と万物は神の創造と信じるのであらうか。人は貧困や危難にあるとき、容易に宗教に接近するというが、太つ腹の大金持ちも念經拝仏して、現世に福を享けるだけではなく、死後に西方極楽世界へ行つても引き続き享受できるよう願つてゐるのではないか。

宗教は一種の極めて複雑な歴史的・社会的な現象であり、必ずその実体および関連する多くの具体的な条件から考察しなければならない。たとえば人々の価値観、思惟方式、心理特徴、社会関係等の面から着眼することで、比較的明晰な論証と結論を出すことができよう。もしうわべだけ論じて、特定なる時間、場所、条件を無視するなら、まにあわせの薬の処方を求めるようなもので、それは何の役にも立たない。

階級社会にあっては、階級抑圧が宗教の存在と発展の土壤であり、レーニンがかつて、階級抑圧によつて造られる災難を「地震」に例えたのは、まさにこの道理を説明したのである。しかし現在、私たちが直面しているのは、歴史において前例のない、新しい情勢と新しい問題である。つまり、搾取階級が基本的に消滅した社会主義社会にあって、どうして宗教が依然として存在するかということである。原因は当然ながら複雑である。

我国では、生産力の発展の水準はとくに低く、貧困、落後、病氣等の災難が、宗教を信仰する人々の主要な原因となつてゐる。このほか、生老病死に直面したときの問題は、ある人々について言えば、それは長期の困惑となつており、彼らは、合理的な理解を得られない時、希望と期待を「来生」に寄せるのである。

このようにみてくると、社会主義時期における宗教問題は、すでに宗教学において、まさに探求すべき重要な課題となつてゐるのである。

上海社会科学院宗教研究所は、党的十一期三中全会で確定した思想路線にもとづき、マルクス主義の立場、観点、方法を導きとし、当面の我国の宗教の現実と密接に結合させ、実地の調査を通して、大量の生きた資料を把握するようにつとめ、そして帰納分析し、くりかえし考え、何度も稿をかえ、ようやくこの『中国社会主义時期の宗教問題』を書きあげたのである。

これはすでに全国哲学社会科学の「第六期五ヶ年計画」の重点科学研究の項目に入つてゐる。本書はすべて七章で、調査報告書九編を付し、約二十万字である。編集の中心となつたのは、元仁沢と蕭志恬の二人の同志で、特に蕭志恬によるところが

最も大きい。編集の過程で、私たちは、動態調査と、静態研究を結びつける方法をとり、十二の省、市、自治区のいくつかの都市と農村に入って、信仰を持つ人々、宗教界の人々、末端の党と政治組織の幹部から、信仰を持たない人々まで、広く接触し、各宗教の歴史、現状と変化、および大衆が宗教を信仰する原因、宗教と社会生活の関係等を理解することに重点をおいた。同時にまた各宗教の歴史と現状についての文字資料四〇万字を収集し整理して、建国以来の各宗教の大事記を収め、また社会科学研究系統、高等院校、文化部門、党政機関、および学術研究に従事している宗教界の人々の意見を求めて、定稿づくりのときの参考にした。

この書は専ら、以下の問題について探索研究し、理論の上で突破するところがえられるよう試みたものである。

一、宗教と我が国の文化との関係。儒家の思想、特にその倫理道徳中の「入世」の観念は、数千年来、人々の意識の中に深く根をおろしている。別的一面では神権は、かららず皇権に服従すべきであり、しかも皇権は至高無上のものであるから、漢族の地区にあっては、いわゆる国教を形成することはなかつたし、また西洋のような宗教戦争を起こすこともなかつた。民間で正統宗教を信仰する人は、絶対少数であり、逆に鬼神観念やそれを崇拜する習俗は、かなり普遍的であつた。

二、建国以来の各宗教の現状の分析。社会主义建設が、各方面で起こした、深刻な変化は、また必然的に宗教それ自身にも影響を与えた。特にキリスト教、天主教、仏教、道教、イスラム教は、帝国主義、封建統治階級の支配から脱けたあと、各宗教とも、政治、経済、教団内の制度、義理の方面のすべてにわたつて、新たなる変化があつて、宗教はすでに中国の教徒の自前の宗教事業となり、宗教信仰は、まさしく公民の私事となつて、その性質も、数千年続いた階級社会における情況とは同じものではなくつたのである。社会主义時期の宗教の存在の根源、社会的地位、社会的作用、および規律の演変などは、すべて我々の再認識を必要とするものとなつた。

三、宗教という、この種の歴史的、社会的現象は、階級根源の消失にともなつて、ただちに消滅するものではなく、宗教それ自身に内在する独特の規律が作用している。この点について十分に認識せずに、行政手段をもつて人為的に宗教を消滅させようと試みたが、これは一貫して行われた宗教政策の「左」の認識の根源であり、その結果、事実と願望のくいちがいとなつたのである。建国して四十年近くの事実も、この点を証明しており、その中の多くの経験と教訓は、記憶にとどめるのに価するものである。宗教には、大衆性、長期性、複雑性、民族性、国際性があり、我々は、真剣、厳肅かつ正確に対応していくべ

きであり、主観的に勝手に、やるべきでないことをやることは、決してできないのである。

四、宗教が客観的存在であることを論証したならば、社会主义の新中国においては、宗教徒は、愛国主義の基礎のもとに、同じものを求めるが、異なるものの存在も認め、広汎な非教徒と團結して、祖国の四つの現代化の建設のために、夫々の仕事の場で心を一つにして協力し、現世の幸福のためにともに奮闘することができる。宗教の規律と道徳は、教徒について言えば、すべて惡を避け善に従うはたらきを持つてゐる。どんな人でも国家と人々のために、よいことをしなくてはならない。その出発点や動機が何であれ、落ち着くさきは社会主义現代化の建設に有利でなくてはならない。この角度から言えば、宗教は社会主义社会と協調することが可能なのである。

五、協調は双方がともになすべきものであり、政府は宗教信仰の自由という政策を、しっかりと貫徹し実行し、どのような宗教を信じていても平等に視なし、信じていよいよといまいと、平等に視なしていかなくてはならない。時に応じて、宗教信仰者に声をかけて、警戒の心を強めさせ、全国人民による易りなき安定團結の、好ましい形成を大切なものとし、宗教徒が公共と法律に従い、國を愛し教えを愛し、社会公益の事業に熱心に従事し、いかなる外国の勢力も我国の宗教事務に干渉したり、あるいは手を出したりしないようにしなくてはならない。

中国の社会主义時期における宗教問題というこの課題は、国内ではいまだ比較的系統立った研究が進められたことがない。私たちが今刊行しようとしているこの書も、微微たる探索の研究成果である。おうおうにして主観的な意志は、客観の実際と距離を生じるもので、錯りも免れがたい。切に願うのは、宗教学を研究する専門の人々の多くの御教示である。

一九八七年一月一五日夜

第一章 緒論

宗教は一種のイデオロギーであり、複雑なる社会的、歴史的現象である。宗教研究の領域はとてもひろい。我国においては、宗教学は開拓発展しつつある新しい学科であり、しかも社会主义時期の宗教問題についての研究は、さらにまったく新しい課題である。

現実の生活は、人々に数多くの問題を投げかけている。階級の根源が基本的に消失した社会主义において、宗教は、ど

うして長期に存在しうるのであらうか。この数年来、ある地区で、ある宗教の信者は、どうして増加しているのか。宗教は、社会生活や、四化の建設にどんな影響があるのか。宗教は、どのようにしたら、社会主义社会と充分に協調しうるのか。またどんな働きをなすべきなのか。党と政府、および社会の各方面は、どのようにして宗教問題に正しく対処すべきなのか、などなど。

これらはすべて、宗教理論の研究に従事する人々、党と政府の幹部、宗教界、さらに多くの人々が関心を寄せる問題である。「中華人民共和国国民经济と社会発展の第六期五カ年計画」の哲学社会科学の分野は、「特に推進すべき我国の社会主义現代化建設において緊急に解決を必要とする重大な理論問題と実際の問題の研究」を提出した。

また宗教問題の研究を、十二の重点項目のうちの一につに列した。

本書は、その呼びかけに対する答えであり、我国の社会主义時期の宗教問題に対する現実的意義をもつ課題として、初步的な探索を進めたものである。

一

宗教は一種のイデオロギーであり、その超自然の神靈を信じ、かつ崇拜するのは、自然力と社会の力が、人々の意識の中で虚幻に反映したものとされる。宗教は、社会が一定の段階にまで発展したときに産まれるものである。宗教の最初の発生は、生産力の水準が極めて低い情況のもとで、原始人が抵抗するすべを知らない自然の力に対する恐怖の感情を反映したものである。階級社会となって後、宗教が存在し発展できた最も深い根源は、人々が己れにまさる力の支配を受けて、それから逃れるすべのないところにあり、労働者が搾取制度の造りだす巨大な苦難にたいする恐怖と絶望にある。宗教の中での苦難は、現実の苦難の表現であると同時に、また現実の苦難にたいする哀嘆と抗議なのである。

マルクスは言う「宗教というものは、自己をまだからえていないか、あるいはからえながらもまた喪失してしまった人間の自己意識であり自己感情である。しかし人間といつても、それは世界の外にうずくまっている抽象的な存在ではない。人間、それは人間の世界のことであり、国家社会のことである」ヘーゲル法哲学批判・序説II訳は大内兵衛等監訳『マルクス・エンゲルス全集』による。以下同じ。エングルスは言う「いつさいの宗教は、人間の日常生活を支配する外的な諸力が、人間の頭の中に空想的な反映されたものにほかならないのであって、この反映の中では、地上の諸力が天上の諸力の形態をとるのである」

△反デューリング論▽。以上の論述は、客觀と主觀の兩方面から、一種のイデオロギーとしての宗教の本質を深く暴いたものである。一九世紀の中頃、ドイツの哲学界では、宗教の本質の問題についてしばしば議論がなされた。青年ヘーゲル派は宗教を人類の精神の創造によるものとした。フォイエルバッハは彼らの唯心主義的な本質を暴きだした。彼は『キリスト教の本質』という本の中で「神が自分の形ににして人を造ったのではなく、人が自分の形ににして神を造ったのであり、神の意識は人の自我意識に他ならず、神への認識は、人の自我への認識である」と指摘した。ただしフォイエルバッハが、ここで言う人は、実際の生活の外に遊離した抽象的な人である。マルクスはフォイエルバッハの唯物主義的な基礎を批判的に継承し、さらに一步を進めて「人の住むのは人の世界であり、それは国家社会である」と指摘した。宗教は、人の自我意識と自我感覺であり、この自我意識と自我感覺とは、社会とまったく無縁なものではない。しかもそれは、すべての社会關係を内容としており、これは一定の自然条件、社会条件の下に生活し、そして自分の運命をつかめないと感じた人の、自我意識と、自我感覺である。エンゲルスの説は宗教的幻想の内容と根拠、つまり自然の力と社会の力を含めた「人々の日常生活を支配している外部の力」を暴いた。

マルクス、エンゲルスの論述は、宗教の存在の客觀的根源について指摘するとともに、さらにどうしてある人々が宗教を信仰することができるのかという主觀的な原因についても分析して、一種のイデオロギーとされる宗教の、異なる社会における共通の本質を暴いたものである。したがってこれら一連の論述は、私たちが中国の実際の問題と結びつけることを教え、社会主义時期の宗教問題を研究する上での指南ともなるのである。

マルクスはいう「宗教は、この世界の一般理論であり、その百科辞典的な綱要であり、その通俗的な形の論理学であり、その精神主義的な名譽問題、その熱狂、その道徳的是認、それのおごそかな補完であり、その慰藉と弁明と存在との一般的根拠である」△ヘーゲル法哲学批判▽。これは一九世紀のヨーロッパの情況についての指摘であるが、ここから宗教が世界観の問題だけではなく、人生観、価値観、道徳観など、多くの方面的思想と、理論の問題をも包括するものとみてとることは難しいことではない。

こうして、現実の宗教を研究することは、哲学・思想の方面に限られるものではなく、まさにマルクスの言うように「もしある。まだ宗教哲学等々のみが、私にとって宗教の真のあり方であるならば、私はまたただ宗教哲学者としてのみ、本当に宗教的

なのであり、だから私は現実的な宗教性と、現実的に宗教的な人間を否認するわけである」——一八四四年の経済哲学手稿▽。

現実の宗教は、複雑な内容を持つていて。一般的に言えば、宗教はすべて一つの具体的、総合的な体系をもつており、少なくともいくつかの方面の要素で形成されている。たとえば、宗教哲学と教義から宗教的戒律と道徳観念などの意識方面での要素、教職の人員（つまり宗教を職業とする人々、以下同じ）と、信徒大衆を含む宗教徒の要素、宗教信仰と関連する、心理と感情分野の要素、宗教生活の主要なる部分を構成する儀式の要素、宗教団体や機構などの組織の要素などなどである。これらの要素はまた有機的に連係して一つのものとなっているのである。こうして宗教は複雑な社会現象であり、それは一種のイデオロギーであるばかりではなく、一つの社会的実態であり、社会生活の中の無視できない構成の一部分であるということがわかる。

社会のイデオロギーの一つとされる宗教は、経済的基礎と連係を生じるばかりでなく、経済的基礎の制約を受けるとともに、それに対する反作用をも生み、さらに社会その他のイデオロギーと、すべての連係も生じる。社会における政治観念、法律、哲学、道徳、芸術などは、すべてさまざまに宗教に対しても作用している。そして宗教がこれらの領域で、展開する中で起す作用と影響もまた少なくない。

特に全員が信教している地区、また宗教の影響が比較的大きな地区では、宗教を無視しては、社会の思想や、道徳規範、民間の習俗、文学芸術などにたいして的確な説明をなすすべがないのである。

宗教のイデオロギーの部分が、社会に対して起こす作用のほかにも、宗教徒、宗教組織と宗教活動などなど、その存在、発展、変化と、社会の政治、経済などの諸要素は、また密接な関係がある。宗教はけつして静止不变なものではなく、発展変化の過程の中に存在するものである。したがつて宗教についての研究は、単に哲学的思弁と論理による推理だけでは不十分である。哲学家は、抽象的な高い空より地上におりてきて、研究対象に触れ、宗教徒の思想、感情、行為の特徴を理解し、宗教が社会でどのような地位と働きをなしているかを理解しなくてはならない。マルクスが一九世紀ドイツの宗教を考察したときも、エンゲルスが初期キリスト教運動と新興資産階級による宗教革命を考察したときも、レーニンがロシアの宗教を考察したときも、すべて宗教と社会の関係の統一に密接な注意を払い、あわせて社会的角度から宗教の存在、演化、および社会への作用について論述した。しかもこれらは、異った時期、異った社会の宗教にたいして、同じようなあつかいをしたのではない

し、概念から出発して推論を進めたものでもないものである。

二

我国の社会主义時期の宗教問題を研究するとき、必ず宗教を社会主义社会の一定の段階において分析を進めなくてはならない。社会主义社会は人類の歴史の上で巨大なる変革を実現したが、この変革は必然的に旧社会からの宗教に影響を与えることになり、宗教とその系列に内在する要素に対して、なんらかの変化を生ずることを促した。そのため宗教の社会における作用もまた変化したのである。当然、宗教のさまざまな要素の変化は、相互に関連し、互いに影響しあっているうえに、さらにそれは平衡的なものでもないのである。変化の条件、趨勢、規則と、その社会への影響を研究するには、多方面から着手しなければならず、実際的、総合的に宗教を把握し、宗教と社会の複雑な関係を把握して、はじめて社会主义時期の宗教が、どのような特性をそなえているかも、深く認識することができるであろう。

建国の初期、周恩来、李維漢達が提出した、我国の宗教の「五性」、すなわち、群衆性、民族性、国際性、長期性、複雑性は、人々が宗教問題を認識し、対応するための指導思想の一つとなっている。表面的に見るなら、どのような社会制度のもとにある宗教でも、すべて「五性」があつてさしつかえない。しかし実際は彼らの言う「五性」は、マルクス主義の観点から中国の解放後の実際とを結びつけ、宗教の特性にたいして科学的に概括をしたもので、特定の意味を持つている。

我国は多宗教の国家である。世界の三大宗教、固有の道教、および各少数民族の宗教等、すべてそれぞれの信仰を持つものを擁し、総計では億を下らない。このような多くの信徒大衆のあることが、一つの大衆の問題であることは疑いない。彼らのなかには、老人もいれば中青年もあり、工場労働者、農民もあり、インテリもいる。旧社会では、一部の人々は、搾取の圧迫の苦難に耐えられず、宗教に慰めを求め、社会の革命に対して冷淡な態度をとった。社会主义といふ条件のもとでは、信徒大衆は政治上、経済上の根本的利益のため、社会主义建設のために積極的に参加している。しかしながら彼らは、依然として宗教を信仰し、宗教活動に参加しており、しかもそれ相当の宗教活動の場所、宗教の經典、刊行物など、特別な要求がある。彼らの宗教感情を理解し、彼らの特別な要求を満足させることは、億万の宗教徒を団結させ、ともに四化の建設の大事に参加させることに関連することであり、軽々しく取扱うようであつてはならない。

我国は多民族の国家であり、五五の少数民族の人口が総人口の約六%を占め、その居住面積は全国の約六〇%ほどを占めており、主として高原や、山地、辺疆の地区に分布している。信仰を持つ人々が少数民族の人口の中で占める割合は、とても高いか、あるいは比較的高いものとなっている。ある民族では、基本的に全員が信仰しており、大衆性は明らかである。こうした民族にあっては、宗教信仰と民族感情、風俗習慣とが融合して一体となつておらず、宗教は民族の文化の核心で道徳規範と見なされている。旧社会にあっては、宗教はかつて統治階級に支配利用されていたが、しかしながら、その民族を団結させ、外からの圧力に抵抗する紐帶の作用も果してきた。今日、全員が信仰するという情況には、ある程度の変化が生れてきたが、現実の情況は宗教と民族とは緊密に聯係しているのである。これらの少数民族を団結させるには、彼らの宗教信仰を特に重視し、尊重しなければならない。そうでなければ、民族の団結に影響がでてくるであろう。

宗教は、人類社会の產物であり、世界のなかで宗教の存在しない国家もないし、民族もない。一九八〇年版『ブリタニカ』によれば、世界の宗教徒は二、五七八、〇四九、九六〇人であり（「各国の宗教概況」による）、全世界の人口の六〇%を占める。かつて多くの国家がある宗教を国教と定めたが、現在でも宗教と政治の関係は極めて密接である。我が国が対外開放政策を実行するとき、多くの涉外事務で、いつも宗教問題につきあたるが、その認識と処理が正当であるかどうかは、非常に重要である。

解放前、我国のある宗教は、外国の布教機構に支配され、帝国主義に利用されて中国侵略の道具となつた。今日、この種の情況は、根本的にあらたまり、宗教は我国の教徒による自前の宗教となつた。独立自主、平等友好の基礎の上に立つて、宗教界の国際的な友好往来を發展させることは我国の人民と各国の人民の間の理解と友好、そして世界の平和の維持に有益である。ただし国際往来を發展させると同時に、国外の敵対勢力が、宗教を利用して、反中国の活動を行うことには注意を払う必要がある。宗教は悠久なる歴史をもつ社会現象である。どうしていま「長期性」の問題を提出しようとするのか。それは我々が、数千年の搾取制度をひっくりかえして、社会主义社会を建設したことにより、ある人は宗教が存在する客観的社会的条件はすでに消滅し、宗教の消滅もうすぐだと考え、簡単な強制的な方法で宗教を消滅させようと企てたことによる。本書は、多方面から社会主义社会にあって、宗教が長期に存在する根拠について論述しようとする。宗教には、それ自身の発生、発展、消滅の客観的規律がある。人類が階級を消滅させ、また社会と自然を制御する能力を大きく發展させ、社会主义と共産主

義の長期にわたる発展を経過して、すべての客観的条件がととのつたとき、また人々が普遍的に科学的な世界観と人生観を樹立したとき、はじめて宗教は、自然に消滅するのである。しかも、これはゆつくりと前進する過程であるから、いかなる手段をもって宗教を消滅させようとすれば、必ず自らが痛い目にあうことになる。宗教の持つ複雑性は、宗教として表現することと、社会、歴史等に生ずる錯走した複雑なる関係のほか、さらに宗教自身がまた一つの複雑な体系を持つてることによる。宗教の表現形式は多種多様で、異なった宗教では、教義、教規、儀礼、組織が異なっているし、たとえ同一の宗教でも、歴史的・社会的要因によつて、異なつた教派を形成している。宗教の思想の複雑さ、教派の繁多さ、教徒の階層の多さ、それらすべてが正確にかつ全面的な宗教問題の認識に一定の困難をもたらす。

建国の初期において、宗教の複雑性は、とくに信仰問題と政治の問題とが、一つに絡みあつてゐる状態を呈していることにあり、工作の重点はどうやつて異なる性質の矛盾を区別し、宗教信仰の自由を保障する条件のもとで、宗教徒を教育して団結させ、帝国主義と国内の反動分子が宗教を支配し利用する局面を改変して、その政治的影響を取り除くかにあつた。

今日、特定の地域での階級闘争と複雑な国際環境は、依然として宗教にたいする影響をもつてゐる。しかし主要な問題は、どのように正確に宗教を取り扱い、広汎な宗教徒を団結させ、もつて中国を振興させるかという点にある。

「五性」は新中国の宗教の特徴である。三〇余年の実践が証明するように、人々の「五性」にたいする認識がくりかえし表れることが宗教政策の成功と失敗を導きだす重要な原因なのである。

社会主義建設の新时期にあつては、より深く「五性」についての理解と研究を進めてこそ、はじめて正しい実践を指導することができるるのである。

三

社会主義時期の宗教問題の研究を進めるには必ずマルクス主義を堅持し、弁証唯物主義と歴史唯物主義の科学的世界観と方法論を、指導思想と方法にしなければならない。

一九世紀、宗教の迷霧がおおつっていたヨーロッパの地において、マルクス、エンゲルスは、唯心主義の誤りを批判し、古い唯物主義のもとでの一面性を克服して、宗教の外面を覆つていた神秘のベールを開き、宗教の本質を暴き、人類が宗教にたい

して認識する歴史の過程において、重要な貢献を作りだした。レーニンはロシアの地で、社会主義革命の中で、宗教問題を如何に認識し、対処するかということについて、卓越した見解と貴重な実践の経験を提供した。

マルクスは歴史唯物主義の観点に立って、社会経済生活の変化から宗教の発展と変化を考察するよう人々を指導した。彼は「じっさい、分析によつて、宗教的な幻像の現世的な核心を見いだすことは、それとは反対に、そのつどの現実の生活関係から、その天国化された諸形態を説明することよりも、ずっと容易なのである。あとのはうが、唯一の唯物論的な、したがつて科学的な方法である」（資本論二三〇）。マルクスは、まさに社会経済の形態と関係づけて、宗教を分析したのである。古代の自然宗教、原始宗教は、人と自然、人と人との間の狭苦しい関係の反映であり、キリスト教の新教は、資本主義経済関係に最も適当な宗教形式である。社会の物質生産の方式が異なることによって、その反映としての宗教もまた異なつたものとなる。まさにこの意味において、マルクスとエンゲルスは「宗教自身にはもともと本質も王国もない。……ただそれぞれの発展段階における既成の物質世界において、その本質を探るだけである」（ドイツイデオロギー）と指摘している。宗教は社会存在の一種の反映とされるものであり、異なつた社会形態では、その反映も同じではありえない。異なつた社会における宗教の特徴と働きを研究しようとすれば、それら各自の社会形態と、社会関係に深くわけ入ることあるのみである。マルクスとエンゲルスは一〇〇年以上も前に生きた。彼らが創立した科学的 세계觀と方法論は、普遍的な意義を持つており、これは私たちが必ず守るべきものである。ただし彼らの、その当時の、かの地の宗教についての具体的な論述は、今日の我国の宗教の情況に手本通り合致するものではない。それ故、我国の社会主义時期の宗教問題の研究を進めるには、マルクス主義の基本原理を堅持するとともに、必ず「实事求是」で「あらゆることを實際からはじめる」という原則に従わなければならぬ。革命の指導者の宗教についての個別の論断に強引に当てはめたり、断章摘句の態度をとつたりしてはいけない。さらに、彼らが一定の歴史的条件のもとで提出した論点を演繹して、社会主义時期の宗教問題についての切実な研究に代えることもいけない。實際から出発するには、すなわち我国の宗教の伝統と現状について、系統的な調査と研究をなし、宗教の實際の中から、それが社会主义時期にあって、発展し變化していく規律を認識しなくてはならない。宗教の調査にあたっては、社会と集団の力によらなくてはならないし、宗教の各層に深くわけ入り、さらに基層の宗教活動と、宗教教徒の中に入らなくてはいけない。宗教の調査にあたっては、広く、深く、忍耐強く進めることができると必要であるし、民族の風俗、習慣、文化の伝統の現実にわけ入つて、豊富で、

生々しい宗教の現状の第一次資料を掌握しなくてはならない。宗教の調査にあたっては、系統的分析などの、現代科学の方法を運用し、材料にたいして、まじめな識別と、理解を進めなくてはならない。社会の発展とともに、つねに新しい情況、新しい問題を収集し、新たなる材料で、我々の社会主義時期の宗教發展の規律の認識を点検し深め、そして、我々の研究成果が、多数の信徒の團結と、国家にたいする基本政策の貫徹、宗教事務の処理、社会主義の物質文明と精神文明の建設に、利益があるようしなくてはならない。

三年余にわたり、我々は、沿海、内陸、邊疆の一〇余の省と市の都市と、農村において、広範な実地調査を行い、多くの信仰を持つ人々、宗教界の人々、信仰を持たない人々、基層の幹部に接触し、彼らと個別の話し合いと共同の討論とを進め、少なからぬ第一次資料を収集した。同時に、実際の調査の中で提出された問題について、マルクス主義の基本原理を導き手として、理論的模索を進めた。本書は、中国の宗教の歴史的な特点、建国後の宗教の根本的な変化、宗教が長期にわたって存在する根拠、宗教と社会主義の関係、さらに宗教信仰自由の政策などの問題について、初步的な考え方を示したものである。宗教方面の理論研究に従事する人々、実際にその任に当っている幹部と、宗教界の友人たちの御教示を請うとともに、宗教問題に関心を寄せる人々の参考に供しようとするものである。

抛磚引玉かもしれないが、我々は、本書が、我国社会主義時期の宗教問題の探索の一助になることを希望するものである。

△付録▽

郊県今昔

——一九八三年六月、蘇北農村社会調査のメモと

社会主義時期の宗教現象の社会的根源の分析——

邳県の地は、徐淮平原にあって、北は山東省と接している。この一帯は、漢民族が持つ悠久なる歴史、文化、伝統の地方である。古代の兩漢王朝における何人かの風雲の人物は、ここで興起しており、今に至るまで、これらの人物についての伝説が

流傳している。

たとえば、岔河公社の黃石大隊では、劉邦の重臣の張良が、かつて橋の上で靴をはかせてあげた、かの黃石公の生れ故郷ということになった。以後、黃石公は、道教の神仙に奉ぜられた。またこの公社には、東の橋頭、西の橋頭があるが、実際には橋はない。伝えるところでは、劉秀（東漢の光武帝）が帝を称する以前、この地にやってきて、田の瓜を盗んだという。盗む前に、東を瞧、西を瞧（瞧と橋は同音）、人の来ないのを確かめたので、この名が付いたという。戴莊公社の、依宿の地は、劉秀が、かつてここで樹によりかかって宿としたために名付けられたという。またこの一帯は、現代史のうえでは、光榮ある革命の伝統のある土地である。抗戦初期の台兒莊の大勝利は、本県と隣接した山東の地で起こった。ここはまた、解放戦争のとき、内外を震撼させた淮海戦役の戦場の一部ともなった。国民党の黃伯韜の兵たちは、邳県の碾莊地区で全滅したのである。邳県の人々は、かつて祖国の独立と解放のために、大いなる貢献と犠牲を払つたのである。

この一帯の自然条件はたいそう悪く、土地は痩せ、天災もしばしばあり、とても貧しかった。

土壤は水を保てず、雨がなければ、たちまち旱ばつとなつた。一旦、大雨があれば、山津波が発生し、県の地勢が低いために洪水の地区となり、田畠の収穫はなくなつた。その上、解放前の反動官僚や封建地主の圧迫搾取と、長きにわたつての生産水準がはなはだ低かつたために、人々の生活はとても苦しいものであった。

三中全会以来の生産と生活の変化

解放後、邳県の人々は全国の人民とともに解放され、生産生活は若干の変化をみせた。ただし、多年にわたり路線が左に偏つたことで、生産の発展は早くなかった。そのうえ、政策の失敗（たとえば水のない土地に稻をまくなど）があり、党の第一二期第三回中央委員会全体会議以前、農民の食料と収入はとても低く、おうおうにして春節のころになると、食料が底をつき、人々がよその土地へ避難することさえも、常のことであった。

このような局面は、一期三中全会ののち、ようやく方向転換を開始した。

特に一九八〇年に始まつた生産責任制と現物支給を遂行して以後は、農民の積極性は高まり、数年来の順調な天候もあって、生産は、年をおつて上昇し、私たちが六月に邳県を訪れたときは、ちょうど夏の収穫と種まきの時期であつたが、いたる

ところ、小麦が豊作のようすであった。

私たちが前後して訪問した、岔河、官湖の二つの公社でも、責任者の幹部はみな三中全会後の、大きな変化を紹介した。

たとえば岔河公社では、一九七七年の食料（小麦、とうもろこし、さつま芋）の総生産量は一三〇〇万斤で、一九八二年は二六〇〇万斤であった。過去一人あたりの一年の取り分は、多い時は小麦八〇斤で、少ない時はわずか一〇余斤であった、そのうえ粗糧を加えても毎年の平均食糧として約三〇〇斤、最も少ない時では二〇〇余斤であった。一九八〇年から、一九八二年の平均食糧は五〇〇余斤であり、一九八二年は六〇〇斤を超えた。そのうえ自留地のものがあり、実際の食糧はもつと多かつた。食糧の内容も変化した。もとは乾燥芋を主食としていたが、今は小麦を主とし、さつま芋は経済作物となつた、酒造工場が買上げてくれるからである。

過去、人の平均の収入は最高の隊で一年に九〇余元、最低は二〇余元、全公社平均で約五〇元であったが、昨年は全公社平均で一六〇元であった。そのうえ自留地と家庭の副業の収入で、実際は二〇〇元にいたつた。

過去、自転車に乗り、腕時計をしていたのは幹部であったが、現在は全公社七千余戸に四千以上の自転車があり、それに乗つて畑に行くのが普通のこととなつた。

一般的に各家にはラジオがあり、若者の多くは腕時計を持ち、家庭のミシンも次第に増えつゝある。新たに部屋を造るときはレンガで造り、草屋とすることはなくなつた。

三中全会後、党の路線方針政策は農村に大きな変化をもたらした。その当初、幹部が生産責任制を実行することに無理解であつたために「苦労すること三〇年、一夜で解放前」とさえ言われた。しかし数年来の幹部や人々への、事実を通しての教育は、党の政策の正しいことを認識させるにいたつた。

とりわけ今年の小麦は大豊作で、邳県の各公社、各大隊は増産につぐ増産で全県の総生産は五億七〇〇〇万斤となり、豊作だった一九八二年の一億二〇〇〇万斤に比べても、歴史上最高の水準となつた。一季が一九七七年全年の収穫に相当する。それぞれの家は喜んで公糧余糧を売りにだした。一軒の農家は三〇〇〇余斤の食糧を消費した。

彼は言う「誰も二度と鄧小平の悪口を言わない。私は彼のためなら命も惜しまない」。彼は「過去に働かずに旨い汁をすつていた奴だけが、鄧小平に反対しているのだ」ということを知つている。党の路線方針政策が、農村の人々に深く理解されてい

ることを知りうる。

数年来、人々の精神面でのありかたも大いに変化をきたした。一〇年の内乱の間、人々の矛盾は重くなり、派閥のいさかいもはげしく、ややもすればコブシをあげ、あるいは武器を取るといったこともあった。過去には家族の中できさえも矛盾がはげしく、喧嘩や殴りあいは、普段に起こった。

請負制以後は、だれもが自分の生産に忙しく各種の矛盾は大いに減少した。盗みの事件も明らかに減った。かつては家畜、食糧、三輪の荷車などを盗んだり、麦を盗み刈りしたりする刑事事件が多かつたが、今は食糧を盗む人は基本的にはいないし、麦の穗すら拾うこともない。

責任制を実行する以前、一般の農民は科学的な播種にたいして無関心であったが、今は自身の利益に一生懸命であるために、化学肥料の使用、良い種の選択などによって増産を図ることに関心をよせ、科学を学び科学を用いることに、大いに積極性を示している。

三中全会以後の、各項目の農業政策は、幹部と人々との関係にも改善をもたらした。かつて幹部のある者は、多くを食べ多くを所有し、公物公金を勝手に使つた。人々は怒つたが口に出することはできなかつた。ある人はついに幹部の自留地の農作物を目茶苦茶にして鬱憤を晴らしたのである。岔河公社黃石大隊のある幹部は言う「二〇余年にわたる幹部と人々との矛盾は、請負制を実行して後、基本的に解決した」。これは現在、公社員の労働の成果が幹部による統制と支配を受けなくなつたからである。それどころか公社員の生産を発展させるため、幹部は肥料を送り、種を家まで届けるようにさえなつた。

このように幹部と人々との関係は対立から基本的な融合へと転じたのである。

ここ数年、邳県の農村の生産と生活は大いに発展し、かつて天災で土地を捨て、毎年毎年、救済の食糧を食べた日々と比べるとその変化は大きい。しかし発達した地区と比べると、総じて言うなら生産と生活の水準はなお低い。豊作の後、農民は毎食にマントウ、油いための漬物ができることに大きな喜びを感じている。彼らは、まだ一部の米麦を備蓄し、一部の粗糧を食事に混ぜて、将来、発生するかもしれない災害に備えている。

農村の青年はさかんに上滌卡や混紡の材料の服装を着ている。しかし夏になつたら丸裸の子供の姿もいたる所で見られる。新しい瓦ぶきの屋根の家も絶えず増えているが、大多数の農家の住居は土の壁、草葺の屋根である。

公社の役所がある町には電気の照明があるが、多くの大隊はまだランプである。衛生の条件も大変低い。請負制の後、その発展の途中では、また新たな矛盾も起つた。少数の富裕な家は、銀行から借金して、いろいろな方法をとり入れ、良質な肥料を先に手に入れることができた。しかし少数の労力のない農家は貧苦に苦しんでいる。

官湖公社のある大隊の支部の書記は言う「富裕な家の一年の一人当たりの平均収入は三百から五〇〇元、多い人は千元を上まわる。貧乏な家はわずか數十元で供出できず、種も化学肥料も買えないので、食糧はますます少なくなる」。彼は言う「年寄りは過去に苦労をしてきたが、いま貧乏人を見ると心がいたむ」。政府は、現在すでに貧困者の救済に意を注いでいる。

文教、医薬、衛生の面について

解放後、邳県の農村は、文教、医療、衛生の事業でも大きな変化を遂げた。郷の政府は、解放の当初、秘書を見付けるのも大変であった。岔河公社は、解放後、街に一つの小学があるだけであったが、現在は一つの中學と高校、二つの聯中（公社經營の中学）があり、各大隊にも、完全小学があり九〇%の学令の児童が入学した。しかし学校は十分ではなく、多くの学生は中学、高校へ進学できないでいる。官湖公社の学令の児童の入学率は九五・五%であり、小学より中学への進学は六四%、中学より高校へは二三%である。全県の小学より中学への進学は三八%である。男尊女卑によつて、岔河公社では、小学校の男女の数はほぼ同じだが、中学における女生徒は四〇%となり、高校ではわずかに一五・二〇%となつてゐる。

農村の文盲はかなりの率を占めている。人口調査を根拠にしてみると、全県の文盲は三七%、青少年の文盲もまたかなりの率となつてゐる。官湖公社の教育事業は、やや発展しているほうであるが、それでも全公社四万二千人のうち、一二歳より一六歳の文盲は二四〇人、一七歳より二十五歳までの文盲は一八〇〇人であった。

文教事業を発展させるには一定の資金が必要である。現在の農村が、農民から資金を調達することは容易なことではない。

そのため大隊クラスの小学校の公社はおうおうにして村の一番壊れた建物となつてゐる。

県の宣伝部の責任者は「全県では五千間の教室が危険とされ修理を待つてゐる。すでに校舎の倒壊があつて先生と生徒が圧傷する事件も起つてゐる」と言う。その県の刑樓公社の小学校には「三泥」の呼び名があつた。つまり、泥の机、泥の椅子、泥の子供（泥だらけの生徒）である。

私たちちは官湖公社新華三大隊の小学校を参観したが、全部が土壁とそれをくり抜いた窓で、ある教室の天井は崩れて危険なありさまであった。教室の中には何もなく、生徒は授業に自分で小さな椅子を持参し、室内は薄暗かった。農村の小学校の教師の資質も、また低い。公営の小学校の教師の程度はまだ良いが、民営の小学校の教師は自身が小学校卒業程度の場合が少くない。大隊経営の小学校はみな民営の教師で、彼らの待遇は低く、全員に責任田があり、農業を兼業しなくてはならず、教育に専念できないでいる。

私たちが官湖公社新華三大隊の小学校を参観した時、農繁期は過ぎていたのにもかかわらず学校はまだ休みであった。大隊の幹部の説明によれば、市が立つときこここの小学校の前は、木材の交易の市場となり、教師は授業をやめて商人となり、その収入は授業の所得よりずっと大きいという。このような教師はどうして教育に専念できようか。

建国以来、邳県の農村の医療衛生の事業にも発展があった。官湖の医院は徐州市の指導する医院であり、条件も設備も比較的良い。岔河の医院は一九五八年以後に建設され、規模も次第に大きくなつて、全県の重点医院の一つとなり、付近の公社の人々も治療にやって来る。そこには内科、外科、放射線科、心電図があり、さらに数十のベッドがある。文化大革命中、農村は合作医療を実行したが、大鍋の飯（国の税金）を食べていただために看病の人も多く、重病の人の医療費はさらに多くなつて、半年も経たないのに資金を使いきつてしまつた。三中全会以後、各大隊は医療室を設けた。もとからのハダシの医者は公社の指導を受け、看病、注射の費用は徴収し、薬を売るにあたつては卸と小売の差額を儲けた。このようにして各ランクの医療網を維持し、それとともに許可を得た個人医者の開業も認めたのである。農村の医薬の費用は個人が負担するから、収入の水準に限りがあり、今の農民は医者にかかるのに大きな制約を受けることになる。彼らが衛生を重んじ病気を予防をするための状況もよくない。

官湖医院の院長の発言によれば、当地の農村の常見病多発病である腸チフス、下痢、腸炎、肝炎などはすべて衛生条件と関係があり、乙型脳炎や、疟疾などは、蚊による伝染と関係しており、冬と春には気管支炎や肺炎がたやすく流行しているといふ。このほか、北方は粗食を食べ労働もきついため腸閉塞が多い。各種の癌と黄曲カビとは、密接な関係がある。とうもろこしの加工のとき脱穀の前に雨がふると、簡単に黄曲カビがはえる。醤油、漬け物、大根、豆類にもカビがはえる。農薬中毒、農業機械によるけが、交通事故も近年増加している。

農民たちは普通の病気にかかったらそれを治療するためのお金はある。急病も治るなら借金しても治療したいと望んでいる。しかし病状が複雑でやっかいとなると、たえず借金することもできず治療を放棄して天命を聽くよりほかにないものである。

総じて蘇北の農村は、文化と衛生の面を根本的に改変し、文化・教育の水準を高め、さらに保険・医療、病気の予防と治療の方面の現実にかなった保障が必要であり、そして常に生産を発展させ、収入を増加させて、長くつらくはあってもたゆまぬ努力をすることが必要である。

迷信が落ち着いて後の思想と習俗

蘇北の農村の多くの農民は、かつて抗日戦争と解放戦争の間に多くの貢献をなし、はなはなだしい時はその命さえ犠牲にした。解放の後、彼らは新生活の建設において精神の面でもとても大きな変化を遂げた。しかし過去の迷信の打破や、移風易俗の闘争では、おうおうにして安易な強圧的命令の方法がとられ、人々がわかった上で問題が解決されたわけではなかった。しかも農村の経済、文化、教育はまだ発達していなかつたので、なお迷信や時代遅れの思想の土壤があり、この種の思想は少しでも機会があればすぐ頭をもたげるということで、古くからのこの種の習慣の力にはかなり頑固なものがある。

解放の時、蘇北の農村には各種の廟が少なくなく、奶奶廟、火神廟、閻帝廟、財神廟等々は土地改革の時一斉に取り壊され、各種の会、道、門もすべて取り締まられた。しかし民間の鬼神信仰は根が深く各種の民間の迷信は盛んに行われ、ほとんどの家ではいくつかの仙姑の位牌を祀っていた。それは一枚の紅い紙の上に「黃二狐娘（黄いたち）の位」「胡姑娘（きつねの精）の位」「子二姑娘（蛇）の位」「白姑娘（蛇）の位」などと書かれていた。その両側に「家門清静、四季平安」などの対聯を貼つたものが多い。旧い思想・文化・風俗・習慣を廃したとき、もうこれらの仙姑を供養できなくなつたが、ある人は位牌を取り去る前に、それらに向って焼香礼拝して「現在の新社会は、私が貴方がたを敬うことを許さない。貴方を山に送つて芸を学ばせよう」と言った。ある人は實際には一枚の白紙を位牌に貼つて覆うだけであった。

祖先を祭る習俗もなかなか変えられないものである。節句・清明節や、七月一五日になると、皆が墓へ行って紙銭を焼きたがるし、少數ながら焼香する者もいる。清明節には墓の上にさらに土を盛り重ねて「添林」と呼んでいるが、土を添えなけれ

ば後継ぎが絶えるというのである。墓の前には一列のアシをつきさして代々の子孫を表わすこともある。

神漢、巫婆、陰陽先生、算命瞎子なども取り締まられたが、聞くところでは近年また台頭しているという。しかし活動は、比較的隠れてやっている。

廟宇や家の中の神位は撤去されたが、しかし大規模な群衆の迷信活動は一度機会があればまた首をもたげる。最も顯著だったのは、一九七九年、岔河公社黄石大队で発生した「黄石公が仙薬を賜った」事件である。

黄石大队にはかつて黄石公の廟があつた。非常に古いもので、解放戦争の時、廟宇は破壊され、いくつかの壊れた碑があるだけであった。しかし廟の跡は、付近の住民によつて聖地として尊ばれ、しかも黄石公は、以前と同じように、この一帯の平安を守ると信じられていたのである。毎年の農暦の二月二五日の廟会の時（廟会は、すでに岔河鎮に移され、物資の交流会となつていて）、午前零時から数百人が焼香、御礼参りを行うのである。一九七九年二月から三月にかけて、黄石公が戻ってきて、天下の人に仙薬を降して、病を治すといふ噂が突然広まつた。当時は、本県、付近の各県、さらに山東、河南から、三万余の人々が集り、はては上海からバイクでやつて來た者まであつたという。彼らは跪まずいて焼香し、卵や、餅菓子の類を供え、自分や家族のために祈り「これこれの病氣を治してください。治れば、いつまでも忘れません」などといふのである。彼らの仙薬の求め方は実は白紙で筒を作り、風が土ぼこりを筒に吹き込むのを待つて、これを「仙薬」とみなすのである。事件は一〇数日も続き、廟の跡地の周囲は人でうずまり、多くの農地が踏み荒された。付近の多くの村ではほとんどの家の人が出かけ、幹部らの数日がかりの教育があつて、事件はようやくさらなる広がりの前でとまつたのである。

そのほかの迷信やデマも簡単に流行する。たとえば一九八一年にもデマがあつた。小麦粉で牛のような形を作り王母娘娘に献ぜよというものである。実際は嫁ぐ娘にギョウザを牛の形に作らせ、嫁の家に贈れば災難を免れるといったものである。またある説では、母親が自ら白い肌着を作れば災難を免れるといもいう。

最近、また伝説があつて奶奶（祖母）が黄色のズボンを作り、姥姥（外祖母）が黄色の上着を作つて男の子に着せれば災難を免れるというのである。一時は附近の各公社の小売店の黄色の布が全部売切れとなつた。今年の四月、学生にたいして乙型脳炎の予防接種を進めようとしたが、たちまち赤目大鼻の野蛮人が来て子供に針を打つというデマがとんだ。女の子はヘソの上に打つとそれ以上発育しないし、男の子がコメカミに打つとゆっくり死に至るという。このため学生は針を打つというのを聞

いただけで散々に逃げだし、そのため予防注射の仕事は、一時、進めようがなくなつた。思想教育の結果ようやくテーマはなくなつた。

また鬼神の思想を信じることにより、農民は火葬を行うことに感情的な対立感を持っている。火葬を免れるために、ある農民は葬式を大大的にやらず、こっそりと死人を棺に収めそれを深く埋めている。農村における男尊女卑や家を代々継承する思想も、計画成育の重大な障害となつてゐる。農民が男の子が欲しいのにはそれなりの理由がある。特に責任制を実行してからは、男の労働力が家庭の主要な収入となつた。労働力が多ければ収入も高くなるが、労働力がなければそれは無理であり、年老いてからの生活の保証もなく、家中で水を運ぶ人すらなくなつてしまふ。

計画出産は基本的な国策であり、各公社はどこでも幹部が専門に分かれて宣伝し実行している。しかし農民にはまだこの考え方方が分つておらず、ある者は別のところで育てたり、女の子が生れると捨てたり溺死させたりすることも起つてゐる。

別的一面では、農村で結婚する時、形を変えた売買婚の現象も起つて、息子に嫁をもらうのは大きな経済的な負担となつてゐる。男女の青年が婚約すると、男方は「伝啓（結納の金品を送る）」の前にまず「過紅」がある。これは「伝小啓」で二から四組の衣服、靴を贈らなければならぬ。その後に「伝大啓」で、衣服の生地二〇着分位は贈らなければならず、その上、腕時計、自転車、ミシンなど、少なくとも五〇〇元以上はかかる。

婚約すると、女の方は夫の家に行き、男の方は少なくとも四皿八碗の酒席を、三、四日は努め、帰る時は、衣服、靴一組を用意する。「見会い」の時は少なくとも五〇元、ある者は一〇〇から二〇〇元を礼としている。中秋節や春節にはぼ男方は女方へ礼物を贈る。これも少なくとも五〇元を超えて、一般では一〇〇余元である。かつてはわずかな手土産程度であったが、現在は、担いだりリヤカーで運んだりして、肉は二〇斤以上、魚は鯉、さらに鶏に、酒は一〇余瓶（対にする）、糕を少なくとも八包み、多ければ二〇包み、さらにタバコである。結婚の時、男の方は三間あるレンガの家を用意しなくてはならない。女の方は、嫁に大ダンス五斗柜、箱子、机、方卓、円卓、自転車、ミシン、ソファ、ラジオなどをつけ、一間では置くこともできない。結婚の酒席は、男女双方とも、皆なを呼ばなくてはならない。男方は、一般に二〇卓前後、多ければ四、五〇卓、女方も必ず一〇から二〇卓である。新婦は、嫁に行く時に自転車に乗り、あるいはトラクターに乗る。それらは五色の絹で飾られている。自転車やマイクロバスが使われることもある。これらは農村の生活の改善を示すとともに、古い習慣を簡単に変え難

いことを説明しているものと言えよう。

民風と党風

一〇年の動乱の中、蘇北の農村は猖獗を極め、宗族の観念が台頭し、人々の争いも多く社会の気風もはなはだ悪いものがあった。党の一一期三中全会以後、安定と團結の局面が起り、社会の気風も好転し紛糾も大いに減った。計画出産や火葬などの問題を除けば、幹部と人々との関係も日増しに緩和している。

しかし生産責任制を実行して後、また新たなる問題が生れた。たとえば土地の境界の争いや殴りあいが起つたりした。誰もが自分の家の生産のみを考え、会を開いても招集が容易でなく、しばしば全村の各家庭を結んでいる有線放送を通じて、大会を開いたりした。その効果は直接のものとは大分異なっていた。

幹部も、おうおうにして自分の責任田に忙しくて、新しい情況のもとでどうやつて人々を指導をするか、まだ方法を模索している。

農民の収入は高くなつたといつても、結局は限りがある。彼らは公的な蓄積基金として納税する以外、集団の福祉や文教事業への支出を望んでいない。

男女不平等や金銭が原因での家庭のいさかいも多い。息子の嫁が見付けにくいために、結婚すると嫁を宝のように扱い、嫁は嫁で男の子を生めば、さらに大変で皇太后と同じようであり、婆さんはいつも怒られることになつてしまふ。姑と嫁の関係のほかにも、夫婦の間、父子の間でも口喧嘩が多い。責任制の後、農薬は、各家に届くようになつたが、はなはだしいときは、喧嘩の後、農薬を飲むという事件さえ起つてゐる。私たちが会つた一部の公社の党員幹部は、気安く人に近づき、人々の間にわけ入り、公社員に溶け込んでいた。彼らは大衆に気をくばり、その仕事振りも丁寧であった。しかし、四人組の党風破壊によつて、私たちは否定的なことがらも少なくないことを聞いている。仕事をするのにコネをつかつたり礼物を贈るので、別の幹部のひどいのになるこれによつて財産を作つた者もあるといふ。

ある公社の党員幹部は面白そうに我々に向つて「貴方がた社会科学院は、コネの関係学問題を研究すべきだ」と述べた。幹部は大いに呑み大いに食い、態度は軽率で、上を欺し下はごまかし、でたらめをすることもある。上級の幹部で良い話だけを

好むものがあるため、下級からの報告をする時は、御気嫌とりの作り話で胡麻かしてしまうのである。

公社の党の委員は、主として生産に一生懸命で、思想工作は軽視して、宣伝しても実効を問わないでいる。ある公社の党委員会の書記は感慨深げに言う「解放の初めは、幹部は専ら思想工作をし、到る処で歌声が聞えたものだ。ところが今は聞くことがない。幹部はみんな生産の任務を達成するのに忙しいからだ」。

ある末端の支部は党の会議を開くことができないでいる。ある党の支部は、眞面目でない人に操られている。

党風は変ったが、根本からの好転を待たなくてはならないことがはつきりしている。

宗教現象の社会的根源

マルクス主義では「存在が意識を決定する。意識は存在の反映にすぎない」とする。そしてひたすら、宗教というイデオロギーを社会生活全体の中に位置づけて考察を加えている。そして搾取の存在する社会の中においてそうであるだけでなく、搾取のなくなった制度である社会主義社会においても、そうすべきであるとしている。

邳県の農村について言うなら、近年、生産と生活に大きな変化が生れたが、しかし生産力ははははだ低く、自然の災害にも十分に対処しきれておらず、人々は各種の病気の怖れからも脱け出でていない。文教・衛生の水準も経済条件の制限を受けている。

こうして人々は、自分の命運を完全に理解することができず、多くの人々は病気を治すために信仰している。これは一つの客観的な現実なのである。

農村にあつては、男性の労働力が大きな役割をもつてるので、相変わらず大多数の女性が男尊女卑の考え方の圧力と偏見から脱け出せず、このことが信者の中で女性が多数を占める原因となっている。

いろいろな社会的原因により、個人の間でも利害の問題が生じ、一つの家庭の中が村八分にされることもおきている。青年は本を読んでもその得た知識を十分に生かしきれておらず、品の良い娯楽もないでいる。これもまた一部の農民や青年を宗教に走らせ、慰めを求めさせることになつていて。

解放以前、邳県には五教（天主教、キリスト教、仏教、道教、イスラム教）の全てがあつたが、仏教と道教が最も盛んであった。

全県に一二〇余の廟宇があり、民間には各種の迷信が流行していた。解放後、宗教と迷信の勢力はかなり消滅した。

ただし一面では、宗教上の問題にたいして、おうおうにして安易に制限を加え、取締りをしたので、先に述べたように廟宇は土地改革以後、他の用途に転用され、二度と存在しなくなつた。そのほかの宗教も何度かの運動の中で、絶えず攻撃を受け、一〇年の文化大革命中、宗教はさらに全面的な制圧のもとにあつた。

別的一面では、生産の発展が進まず、ある程度の天災や人災の被害も受けて、宗教観念を生みだす土壤はあつたのである。永い間、人々の脳裏にあつた鬼神の觀念は、軽々しくは消えないものである。したがつて一たび宗教信仰自由の政策を採ると、キリスト教はその特有の敏捷性と適応性で、いくつかの地方でほかの宗教に取つて変り、比較的大きく発展したのである。

このほか、一〇年の文革は、社会の氣風と党の威信を破壊したが、宗教の道徳信条と戒律を、教徒自身が実行することによつて、ある程度の影響を社会に広げた。少なからぬ幹部や大衆は、教徒は人をなぐらない、喧嘩もしない、タバコを吸わないし、酒を呑まないので、その結果隣人との争いも少なくなつてゐる。

教徒は盗ますかなり誠実である。生産隊の隊長は教徒に現場の監督をさせたり倉庫の管理をさせたりすることが多い。教徒は拾つた金を胡麻かさないし、またよろこんで人の手助けをしたりする。教徒は宗教の集会に参加するために、おうおうに朝暗いうちに起き、教堂や集会所に行くが、集会の秩序は良い。これもまたしらずしらず宗教の影響を拡大する。

總じて言えば、宗教現象を觀察し分析するのはこの社会全体を離れてすることはできないし、その上、宗教の情況も、また一面では社会の鏡であり、それは曲折しつつ、その時代の農村の物質文明、精神文明建設における種々の問題を映し出していい。もしこの問題を無視して、宗教にたいして限られた方法で処理するとしたら、明らかに非現実的であり、これはマルクス主義に違反するものである。「社会主義の条件のもとで、宗教問題を解決する唯一の正確で根本的なやりかたは、宗教信仰の自由を保証することを前提とし、社会主義の經濟、文化と科学事業の、大きな發展を通じ、社会主義の物質文明と精神文明の巨大な飛躍を通じて、徐々に宗教が存在し得る社会的根源と認識の根源をとり除くことである。このような大きな事業は、当然ながら、短時間のうち、また一代、二代、三代のうちに成就しうるものではない。長い歴史の時を通して、いくつかの世代を過ぎて、広く信教と不信教の人々の共同の闘争を包括して、初めて成就できるものである」（「我国の社会主義の時代の宗教問題の基本觀点と基本的政策」『新时期統一戦線文献選編』一四〇—一五頁）。

我々も、調査の中でこの論文が科学的で、歴史唯物主義に適うものであることを痛感した。この方針に従つた宗教政策を行うことによつてのみ、各種の唯心主義的な「左」の影響を除き、さらなる大きな成功を得られるであろう。

福建省の佛教寺院の生産の展開と労働情況の調査について

一九八四年四、五月の間、我々は、福建省で佛教の活動の現状について若干の調査研究を行つた。本論はそれに関する調査報告の一部である。

福建省の大部分の寺院は、文革前から僧尼を組織して生産労働に参加させる伝統があつた。たとえば福州の佛教協会では、かつて前後して、紡績、竹の工芸品、裁縫、五金、装訂、タバコ、糸撚りなど、八つの手工業の工場を始めていた。そこでは佛教徒（僧尼と男女の居士をふくめて）五〇〇余人が労働し、生産はとても良かつた。郊外の寺院は僧尼を組織して、農業や副業の生産労働に参加した。彼らは稻や野菜をうえ、茶畠や果樹園を作り、薬用植物などを植え、生活は基本的に自給できていた。そのほか各地の山間部の寺院も、農業と副業の生産を行い、どこも一定の成績を納めた。

一〇年の動乱ですべてが破壊され、工場は移り、農業と副業の生産も頓座した。党の一一期三中全会前以後、宗教政策も次第に落ち着き、省の宗教工作部門と佛教協会は活動を再開するとともに、各地の寺院の僧尼を組織し「一日不作、一日不食」の伝統精神を発揚して、その土地にあつた各種の生産労働に参加させた。現在では極く少数の寺院が、いくつかの米粉加工場、裁縫組、線香工場などを建てて手工業労働をしているのを除くと、主として農業、副業の生産とサービス性の労働を行つてゐる。山間地の寺院ではどこでも一定の労働力と土地があつて、農業、副業を行つてゐる。彼らは水稻、落花生、黃豆、野菜を植え、果樹園、茶園を経営し、薬用植物・菜種・茶を植え、森林を管理するなどしている。都市部や観光地の寺では各種のサービス性の業務を行つてゐる。たとえば招待所、小売店、精進料理店、茶店、写真館などであり、僧尼を組織して労働に参加してゐる。現在、全省のほとんどの寺院は、生産労働によつて経済的に良い状態にある。食糧は自給しても余りがあり、

ある寺は生活費を自給しても余りがあり、ある寺は生産の蓄積で寺院を修理し、「以廟養廟」のところまでいっている。

多くの僧尼の精神面での様相も変化した。彼らは自らを「自力で食っている労働者」と誇り、祖国の「四化」のために貢献していることを誇りにしている。現在、同省の寺院の僧尼が生産労働に参加している情況と経験について次に述べよう。

一、寺院の僧尼の生産労働への参加の一般的な情況

福建省での僧尼を組織しての生産労働への参加は、山間部の寺院の方が良い結果を得ている。これらの寺院は、都市から離れており、また高い山にあって、観光客も少なく、大部分は、海外華僑の寺院の僧による援助もなく、布施や援助の信徒も少くない。言葉を変えて言うなら、彼らは主として香華料や、仏事での収入で生活を維持するのではなく、生産労働を通し、自力更生によつて「自養」の問題を解決しているのである。大部分の寺院は、基本的に食糧自給をしているだけでなく、さらに僧尼への生活費も年毎に高くなっている。ある寺の農作物生産量は、その地の生産隊や農民の水準を超えている。ある人民公社では、大隊と園林管理部門が茶園場、林、果樹園を運営していたが、何年間も經營はうまく行かず生産もひどく悪かった。後に仏教の僧尼に經營を委ねたところ生産は好転した。こうして各地区の公社では、開拓した土地や園林を寺院に管理させたが、その中で生産が比較的良い寺院は次のようである。

〔福州の崇福寺（福州市佛教安養院）〕

ここは年寄りの女性仏教徒の安養（養老）院になっている。現在、尼六五人がいる。これらの人には三種に類型化できる。一は労働できない老尼で、寺院が養老の責任を負っている、四五人がいる。二は服務工作の人達で、寺務の管理や老人の生活の面倒をみている一〇人がいる。三は生産労働に参加している人達で、直接には稻や野菜を種えたり、火葬や遺骨処理の仕事に従事している一〇人がいる。寺には土地一〇余ムーがあり、一九八三年には水稻八・五ムーを作り、年の総生産は一三、〇〇〇斤、每ムー平均一、五〇〇斤であった。野菜は二ムーで自給できた。別に火葬の設備三個所があり骨灰保存室一個所がある。一九八一年の総収入は二四、一九〇元で、そのうち農業生産の収入は四、三九〇元、火葬や遺骨預りの収入は一六、八〇〇元、仏事収入は三、〇〇〇元であった。総支出は二二、五九四元で、ここには老尼の生活費、服務員や生産人員の給料、医療費、公共費も含まれている。收支は相応して、少し余剰がある。その中で、養老の僧尼については、寺が食、住（個室）、医

療の費用を負担し、生活や行動が不自由な老尼に、専門の世話人を配置して面倒をみている（一人につき毎月民生部門より五保の金八元が支給され、寺から一八元が補填される。その中で食費二一元、小遣い五元を支出する）。服務人員は毎月三五ないし四〇元、生産人員は労働量に応じた報酬であるが、一人毎月五〇余元である。この寺は一九八一年から、すでに自給して余剰を生んでいる。

〔寧徳県の支提寺〕

この寺には現在、僧が四四人いる。高い山にあるため、かつてこの寺の僧の生活は、とても苦しく、いつも芋を主食としていた。近年、荒れ地を開き種をまき、多角經營をして、生活は大いに改善された。現在耕地四〇ムーがあり、稻作を行なうほか、林場、茶園、薬園を經營、さらに自ら発電所を建て、生産と生活の照明に使っている。一九八三年のモミの収入は、三〇、〇〇〇余斤であり二、〇〇〇余斤を供出した。そのうえお茶の葉、薬材などの生産で、年収一五、〇〇〇余元に達している。寺僧は食事を供給されるほかに、一人毎月二一元を得ている。生産と經營管理がうまくいっているため、省の佛教協会と関係部門の好評を得ている。

〔寧徳県の金浪寺〕

この寺には僧尼が六人（僧四人、尼二人）があり、一〇人まで収容の準備をしている。耕地面積はわずかにハム一ばかりであるが、寺の責任者はうまく經營をしており、一九八〇年には茶の苗一二〇万本を植え、一九八一年には一四、〇〇〇元の収入が有った。そのうえ稻（年収五、〇〇〇余斤）、茉莉花、野菜などの収入があつて、一九八三年には全てで一六、〇〇〇余元を得た。現在、生産を拡大しており、茶の苗二〇八万株を植え（明年には、五〇〇万株を植える準備をしている）、また生産の高い茶の畑五ムーを開いたり、毛竹、茉莉花、油桐、杉などの生産の發展を計画しており、毎年一〇万元の収入の目標に向つて奮闘中である。生産が良かつたため、当地の宗教工作部門と仏教協会の賞賛をえている。彼らは生産を挙げたばかりでなく風格も高い。と言うのは、彼らは収入は高いにもかかわらず低い水準の生活を守つており、衣食を寺から供給される外は、一人毎月一二元の小遣いを貰つていいだけだからである。大量の余分は、寺の修繕、名勝古跡の保護に充てられており、これはなかなかできない。尊ぶべきである。それともに茶を植えることで我国の茶業の生産に貢献している。これにより当地の茶業局は、今年特に予約金として三、七五〇元を支出し、彼らの生産の拡大を支持している。

〔福鼎県太姥山の白雲寺〕

この寺には現在僧二〇余人がおり、荒れ地四〇余ムーを開き、水稻、さつま芋、黃豆、茶、藥材などを植えている。一九八三年には、水稻四ムー、穀物三、〇〇〇余斤、さつま芋七、〇〇〇斤、黃豆一、六〇〇斤、茶二、〇〇〇斤を収穫した。一九八四年には新たに茶五万株を植え、また杉、松、毛竹などを植えた。現在、僧は自給して余りがあり、食料、生活費を支給するほか、新しく二階建の建物を建て、僧の居住条件を改善したところである。

〔福鼎県の靈峰寺〕

この寺には現在僧尼四八人がおり（僧が三〇人、尼一八人）、年老いた人が多い（五〇歳から七〇歳が三人、七〇歳以上が一三人）。働ける人一三人、半分位の人が四人である。耕地面積は田畠三三ムー、畑が五ムー、別に山林が一五〇余ムーである。水稻、さつま芋、茶、茉莉花、甘庶、野菜などを植えている。一九八三年、二二ムーの水稻からモミ三三、八〇〇斤を得、一、三〇〇斤を供出し、余った三、二五〇斤を売った。全年の農業、副業の総収入は一四、二一〇元となつた。さらに精進料理など旅遊業の収入が八、七七三元があり、すべての年収は二二、九八三元があつた。その中で生産収入は総収入の六一・七%である。生産が良いために、現在すでに自給に余りがあり、全体の僧尼に食費を供するほか、働くことのまったくできない老いた僧尼へ年に三〇元の小遣いを与えている。生産能力のある僧尼は、平均年に三〇〇元前後の賞与ができる。余った金は基本的な建設（脱穀場、倉庫、橋などの修復）、大殿の修理、造像などに充てている。近年、自家発電所を作り照明と生産に充てている。

〔福鼎県の坪興禪寺〕

これは新たに建てられた寺で、もとは坪崗仏教茶場であった。現在、僧尼二人（僧一六人、尼五人）がおり、ここも年老いた者が多数を占めている。その中で、一八歳から三〇歳までの者はわずかに五人で、五〇歳から七〇歳までの者が一四人、七〇歳以上の者が二人いる。これからして働けるもの五人、半分位の者七人で、残りはまったく働けない。

現在、土地と農田四〇ムーがあり、水稻を三・三ムー、さつま芋一五ムーを植えた。別に茶園、山林などの土地が相当にあり、黃豆、土豆、油菜、野菜、茶、太子参などを植えている。すでに食糧、野菜は自給している。一九八三年の総収入は五、八一一元で、その中の生産収入は五、五一元、九〇・五%となつていて。僧尼は、食費を除いて、毎年一人、七二元から一二〇元を得ている。生活水準は決して高いとは言えないが、彼らは廟の修繕や、房の建て直しをするために、三年間、賞与な

しでやっていた。このような艱難辛苦を乗り越えて創業する精神は仏教界の賞讃を得ている。

〔連城県の中華山性海寺〕

この寺には、現在、僧が二〇余人いる。彼らの生産の土地は、当県の新泉公社が彼らに引き渡してくれたものである。一九七八年、新泉公社の人々は山に油茶場を開拓し、油茶林三、五〇〇余ムーを植えた。一九八一年、党と政府が宗教信仰自由の政策を着実なものにする過程にあたり、県の統戰部と関係方面が協議しては、中華山性海寺を僧の管理の下に返し、さらに油茶場が持っていた財産、そこには生産機材と、生活資料（米粉加工場、トレーラー、発電機、脱穀機、さらに一〇二三平米の小屋など）を含めて全部を、寺院の僧たちの管理に返したのである。双方の協議を経て、一九八五年（油茶林は収穫を開始した）より、生産の総収入を三分、七分として、三〇%を公社へ、七〇%を寺のものとしたのである。現在、油茶林の三、五〇〇ムーのほか、なお農田一六ムー余、水蜜桃二〇〇株、山東梨五〇〇株、ミカン一六〇株、茉莉花二・五ムーがある。またレンガ工場建ててある。現在、僧たちの生産意欲は高く、付近の仏教徒達も食料、農具持参でやってきて労働し、ある時は毎日、多い時で一〇〇人に達している。

このほか観光開放の寺となっているものは、耕地がないために僧を組織してサービス性の労働に参加し、観光客にサービスしていることもある。この方面で良い結果を得ているものに、福州鼓山の涌泉寺とアモイの南普陀寺がある。

〔福州の鼓山涌泉寺〕

現在、僧衆六〇余人がいる。寺が所有する土地は少なく、水稻三ムー、野菜六ムー、茶園ハムーのほかは、農業、副業による生産の発展を期待することはできない。現在、主に観光の需要に合せて、精進料理部、冷飲部、服務部などのサービス性の仕事をしている。一九八二年から一九八三年の営業額は三八万三九三九元に達しており、基本的には自養の問題も解決している。僧の生活費も一人、毎月三〇元から四〇元となっている。

〔廈門の南普陀寺〕

現在、僧五〇余人がおり、その内もからの僧一〇余人（この人達は寺務処に所属する集体企業の職工もある）で、新たに加わった養正院の学僧三七人がいる。そのほか職工七〇余人（僧ではない）がいる。この寺は寺務処を設け二つの部門を擁している。一つは集体企業で、精進料理部、小売部、写真部などがあり、一つは事業単位で、収入には門票、招待所、香油費、およ

び寄付などがある。企業単位に参加している職工の平均工資は、一人毎月五〇元から七〇元で、さらに奨励金や退職金の福祉もある。毎月の門票の収入は約四、〇〇〇元で、信徒による香金が毎月四、〇〇〇元、養正院の学僧の生活費はここから支出される。青年僧は衣と着物を支給されるほか、毎月の生活費三〇元が支給される（その上、海外華僑からの供養費の送金があり、実質的な毎月の平均収入は五〇元前後である）。現在、この寺の一切の収入は職工や僧の工賃のほか、主として寺の修理、仏像の塗金に使われている。このように、年々余剰があつて、福建省ではかなり豊かな寺となつていている。

二、僧尼を組織した生産労働のいくつかの経験

福建省各地の宗教工作部門と仏教団体は、寺院の僧尼を組織し生産労働を発展させる中で一定の経験をえた。概括して述べよう。

(1) 常に教育を進める。各地の宗教工作部門と仏教団体は、僧尼を組織し生産労働に参加させるに当り、各種の会議（仏教代表会議、僧尼の座談会、學習会など）を利用して、たえず僧尼への教育を進めた。たとえば省の第三回仏教代表会議では、全省の僧尼に呼びかけを行い、彼らが自力更生と自力で食べる道を歩み、仏教の農業禪修行と共に重んずる優れた伝統を発揚し、生産労働を愛する心を養成し、社会主義建設に貢献するよう求めた。仏教代表大会で通過した省の仏教協会の「章程」の中でも、この点を明確にしている。すなわち「中国共産党と人民政府の指導の下、全省の仏教徒を団結させ積極的に社会主義現代化の建設に参加し、我国を高度の民主、高度の文明の社会主義現代化の偉大な強国に建設する」としている。

福州市の宗教処もまた各種の会議を通して、党の一二期三中全会以来、全党がその工作の重点を社会主義現代化の建設の精神に移したことを宣伝し、多くの僧尼がこの転換に適応し、能力の及ぶ限りの生産労働に努めて参加し、四つの現代化に努めるよう求めた。

福鼎県の仏教代表の会議でも、一人一人の僧尼が国を愛し教えを愛し、生産して自ら自給し、文物を保護し、「四化」に貢献することを求めた。県の仏教協会の「章程」の中でも、彼らの任務は「全県の全ての仏教徒を団結させて生産労働に参加し、その土地にあつた生産を発展させよう」とされている。僧尼の愛国の公約の中でも、また「寺の生産、自養の基地を堅持して、食料、油、茶、林、薬材など、多くの経済作物の生産を発展させ、自給して余りがあるようにし、国家の「四化」建設

を支援しよう」と規定されている。

寧徳県はそれぞれに分かれて学習する方法を採用し、僧尼にたいして愛国守法の教育を進め、彼らが寺において自養と労働の素晴らしさを認識すべきを強調している。たゞまざる思想教育の進行、特に仏教中の「一日不作、一日不食」と「莊嚴国土、利樂有情」などの教義からの教育を進めることで、僧尼は比較的楽にこれを受容した。これらによつて多くの僧尼の生産意欲は高く、次第に「生産自給」「労働光榮」の思想を樹立するにいたつたのである。

(2) 寺院に協力し、僧尼が生産労働に参加するための積極的な条件作り

よい労働生産を行うためには生産のための基地がなくてはならない。各地の宗教工作部門は、ある場合は多方の関係部門と研究して占拠されている土地を返し、ある場合は一部の荒れ山を支給し、僧尼を組織して開墾させ種まきをさせた。たとえば福鼎や寧徳の宗教工作の幹部は、その方面的関係部門と連絡して、他人に占拠されている寺の土地を一つ一つ次々に回収し、僧尼のための労働基地とした。同時に一部の荒れ山を選んで、僧尼の開墾と種まきに任せた。福鼎の坪興禪寺と寧徳の金湧寺は、いすれも県の宗教工作部門に要請して一部の山地や、荒れ地を分けてもらい、僧尼の種まきのために与えたのである。寧徳の天王寺は、県の関係部門の大いなる支持の下、たちまちのうちに占拠された土地を回収した。鼓山の涌泉寺はもとからの土地すべてを、文革中に当地の生産隊の農民に占拠され、現在、一部は返されているが、なお一部は交渉中である。連城県の中華山性海寺は、公社から無償で、一つの油茶場を貰つたが、これらはすべて当県の政府部門の大いなる協力のもとで得たのである。このように多くの宗教工作の幹部が、皆な寺の土地を返すという大きな仕事を成し遂げているのは宗教政策を着実にする重要な部分となつてゐる。

(3) 寺の特徴を生かし、土地に合せて僧尼を組織して、生産労働に参加させる。

条件が違うためその土地に合った各寺の特徴を發揮していくことは、僧尼を組織して、生産労働に参加させた上で一つの重要な経験となる。土地の面積が少ないが、町に近くて参觀者の多い寺では、僧尼を組織して副業的な生産とサービス性の仕事を行つてゐる。

たとえば福州崇福寺では火葬や遺骨の預りをやり、福州鼓山の涌泉寺やアモイの南普陀寺では、主として服務部や精進料理部などを經營している。高い山や町を離れた地で観光客も少なく、荒れ山の土地の多い寺では主として僧尼を組織して荒れ地

を開いて種まきし、多角経営を発展させている。寧徳地区の数県の寺ではすべて食糧を植え、また茶畠、竹林、薬材など、多種の経営をなしている。同時に労働力に強弱の差があることが、生産の内容を決定している。おおよそ年老いたり、虚弱であつたりする者と、菜姑（尼姑）の多い寺では主として茶場を経営しており、身体が頑健な僧は水稻を植えたり、多種の経営をなしたりしている。特殊な技能を持つ僧はその特徴を生かすため、専門に組織して専門労働に適合させている。福鼎県の靈峰寺の僧尼は、一つには年寄りが多く、二には菜姑が多いため、四八人の内、完全に働く者一三人、半分の者四人、残りは働けない者となっている。ただし人によつて適当に配分することで生産は良い結果を得ており、僧尼の生活は年を追つて高まつていて。また寧徳県の金湧寺の当家法師は、茶苗を栽培することに長じており、県の茶業局と契約して専門に茶苗を育成している。

（4）技術指導を進め、科学的な農耕を拡大する。

いくつかの県市の宗教工作部門では、常に現地に出かけて生産の指導を行つており、僧尼に科学知識を紹介し、定期的に寺へ科学的農耕に関する図書を送つており、対外開放して寺の僧尼に閲覧させるよう動員している。また僧尼を組織して映画を観させるときは、まず物語映画を、その後科学映画を放映して僧尼の生産技能を高からしめている。元来、寧徳県のいくつかの寺の植える水稻は、成長という点からすれば、近隣の農村の生産隊の農村と比べても良い方なのであるが、収量は人並みだつた。原因は僧尼は田植えをして虫取りをしないからで、彼らは虫取りは殺生であつて仏教の戒律に反すると考えていたからである。県の宗教工作的幹部はまず各種の会議を通じて科学技術の図書や資料を配布し、科学的農耕の教育を進め、彼らを組織して農業生産と虫を取り病気を減らす映画を観せた。その後、彼らを連れて付近の農民が虫退治をして後の成長の良い稻やその他の作物を実地見学をさせた。事実の対比を通して、僧尼達が、虫取りをした作物の収穫が、しなかつた畑の収穫よりも高いことを知らしめたのである。同時に僧尼は「害虫を殺すことは殺生か」「仏教の戒律に違反しないか」を討論し、討論を通して皆は害虫は悪人のようなもので、害虫を殺すことは戒律に違反しないことを認識し、虫を除くことは殺生だとの観点を捨てたのである。近年来、この県の僧尼は誰もが虫取りに同意し、科学的耕作をすることを望んでいる。現在、彼らの農作物の生産量はすでに当地の生産隊よりも低くなっている。

（5）定期的に大会を開き、先進を表彰し、生産経験の交流会を開く、

毎年、各レベルの佛教協会は佛教寺院の農業、副業生産経験交流会を開催し、先進者を表彰して生産を促進している。一九八四年一月四日から九日まで、省の佛教協会は、福州法海寺で大会を開き、各寺の僧尼の代表が生産成績と交流経験を紹介し、最後に生産先進の寺院一七、生産工作の先進の個人一七人を選び賞状と賞品を与えた。四月下旬、寧德県の佛教協会は、支提寺において佛教寺院の生産経験交流会を開催し、席上、生産の成績を紹介し、経験を交流した。寺院と個人の先進者の模範を選び賞状と賞品を与えた。この種の会議は確実に一定の促進作用となっている。たとえば寧德の天王寺は、金湧寺の茶の収穫の多いのを見て、それに学び六〇万株の苗を植え、また金湧寺の僧が出かけて指導に当るよう依頼した。

省の寺院の生産交流の席上では、集った僧尼は皆な慎重に一九八四年の各項の生産企画を創り直し、元來の基礎の上に、さらに各項の生産を高め、国家に貢献しようというものである。ある代表は自分の寺の生産の向上を図るだけでなく、それぞれの寺院の僧尼が、皆な佛教の優れた伝統を継承発展し、寺院の生産を良くし、本当に「自食其力」、「以廟養廟」となるよう積極的にはたらきかけることを表明したのである。

三、寺院の生産を発展させることによる長所

寺院の僧尼が生産労働に参加することは、時代の要求に適応し、佛教の優れた伝統を継承したものであるとともに、以廟養廟の精神を貫徹し、僧尼自らがその力で自らを養う労働者となるうえでも利があり、また国家の文物古跡を保護する点でも利があり、「四化」建設に貢献している。これが我国の社会主义という条件の下での佛教發展の道と方向である。

(1) 佛教の優れた伝統を継承する

僧尼の生産労働への参加は、わが国の佛教の伝統である。伝えるところでは早くも東晋の時代、農業生産に参加したといふ。唐以後、禅宗の百丈禪師は叢林制度を創立し、『百丈清規』を定め、佛教徒に「一日不作、一日不食」の説法をなした。これ以後、出家人が生産労働に従事することは、一時の気風となつた。これよりすれば福建省の僧尼の組織が、生産労働に参加するのは、佛教の良き伝統を完全に継承したものである。多くの僧尼は佛教の教えを、代々信じ行ってきた。これにより生産労働に参加することも楽に受け入れたのである。たとえば寧德地区の多くの僧尼は次のように考えている。「過去、我々は生産労働への参加をよしとせず、気が進まないがらも、ただ施主の布施や仏事の収入によるだけであった。それは社会の中でも軽

蔑されていた。さらに重要なのは仏の教えを守らず、仏教の伝統を忘れてしまったことである。現在、生産労働に参加することは仏教の良き伝統を回復し、社会においても我々出家人への見方を変えさせた。これこそ私たち仏教徒の希望するところだ」と。こうしてこの一帯の多くの僧は「莊嚴国土、利樂有情」という仏陀の遺された願いを実現するために、生産労働を続けることを表明したのである。

(2) 社会主義の条件の下、仏教発展の方向を確立する

仏教には僧尼が労働に参加するという伝統があるが、しかし明清以来、仏教は衰退の方向に向い、僧尼はひたすらに仏に頼つて生活し、「死人によって生活し」、拝讃し、おみくじをひくなどを盛んにして、徐々に生産労働から離れていった。解放以前、大多数の寺院の僧尼はほとんど労働に参加しなくなった。解放以後、偉大な土地改革の運動中で僧尼もまた一部の土地を分けてもらった。彼らの中の多くの人は労働生産に参加し、次第に自己を自分の力で食う労働者に改革しつつある。この点から言えば、僧尼が生産労働に参加することは、我国の社会主义社会の要求であり、また今後への仏教発展の道と方向を示している。「労働しない者は食えない」。这一条は社会主义の原則である。僧尼も公民の一部として、同じくこの原則を実行すべきである。しかも仏教で奉じる「一日不作、一日不食」の教義とこの原則は完全に吻合している。したがって組織的に僧尼を生産労働に参加させることはすでに時代の要求に適応し、また仏教の教義に符合しており、正しく今後の仏教発展の方向とすべきなのである。

(3) 自分の力で食べ、寺の力で寺を維持し、国家の負担を軽減する

宗教信仰の自由の政策をさらに地についた進展をさせる中で、仏教寺院を開放し、仏教信徒の正常な活動を展開する場所としなくてはならない。関係部門はかつて寺を開放し、自らの力で食べ寺の力で寺を維持するという道をつけるべきを提案したことがあった。この一点に到達する唯一正確な方法は、僧尼を組織して生産労働に参加させることである。福建省は正にこの認識にもとづき、多くの僧尼が能力の及ぶ範囲で生産労働に参加するように呼びかけ、組織し、一定の成績を得たのである。

現在、当省で条件の整った寺は基本的には「以廟養廟」を実現したのである。たとえば寧德地区の大多数の寺は、すべて僧尼が自力で生活しており自給して余剰がある。たんに労働力のある僧尼の生活が良いだけでなく、いくらか労働能力を失った老僧尼もまた養うことができ、社会の負担を軽減している。福州の崇福寺は正しく生産が良いため、そこの安養院で養老中の四

五名の老いた僧尼の晩年の生活は非常に安穏なものとなっている。

(4) 文物古跡を保護し、「四化」のために貢献する。

僧尼は生産労働に参加して生活を自給しているが、余剰を使って、寺を修繕しており、これは文物古跡を保護することについている。福建省のいくつかの寺は歴史的にかなり古い。たとえば寧德県の支提寺は、唐の咸通三年(八六二)の開基で、宋の開宝四年(九七二)に整備されている。今から一〇〇〇余年以前である。また福鼎県の仏教は、その淵源は南北朝の肖梁までさかのぼりうる。この寺、たとえば昭明寺の塔は、これも今から一〇〇〇年近くたつものである。この寺はほとんど修理されず、文革中にも破壊され仏像もほとんど失われて残っていない。もし修繕の時期を逸すると重要な文物古跡が湮没の危機にさらされるところであった。現在、生産の良い寺はほとんどが生産労働の収入の中から一部を供出して、殿堂の修繕や仏像の再生に充てている。一定の国家の文物や古跡を保護する運動が始まっているのである。このほか寺の生産が良いと、それはまた国家の「四化」の建設において利がある。多くの寺が、茶園を開いて茶を生産し国家の輸出を支援している。金渙寺の僧は大量の茶苗を植え、さらなる茶の生産発展に貢献しているし、支提寺の僧が毎年国家に納める食糧、茶、薬材は、生産高五〇〇〇から六〇〇〇元に達し、「四化」の建設中において多大な役目を荷なつてているのである。

四、問題の所在

福建省の寺は、生産労働を進める中でまだいくつかの問題を抱えている。

(1) 一部の寺は土地を占拠された今まで、一部分はまだ回収されていないでいる。そのためある寺では耕地がはなはだ少なくて、生産をさらに発展させるのに影響がでている。

(2) あらたに招いた僧尼のなかには少数ながら、食事の貧しいことや労働を嫌うこともある。あちこちへ移動し、生産に心を打ち込めない者もある。ある者は公然と労働への参加を希望せず、大きな寺へ生きたいと表明する者もいる。

(3) 寺の僧尼の補充の問題も解決を要しており、一般の寺はどこでも僧尼が少ないとを感じている。ある寺には労働力のない年寄りの僧尼が過度に集中しており、このため生産の上で労働力の不足が起きている。そして労働力のある僧尼は、自分の働きはそれらの年寄りの養老のために必要であるが、負担しきれないと感じている。これも彼らの積極性に影響を与えてい

る。

(4) 都市や観光地にある寺は、どうしたら自分の利点をもととして、さらに良く労働を発展させ、主として布施や寄付金の収入で僧尼の生活を支えている状態を改善できるかという問題がある。

一部の仏教青年の信仰の原因分析

近年、宗教信仰の政策が落ち着きを見せるにつれて、各地の仏教寺院は次第に宗教活動を回復してきた。一部の青年らがみせる仏教信仰にはたいそう熱心なものがあり、はなはだしの時は、寺に行つて出家し僧尼になるのを望む者もいる。

たとえば仏教の伝統の古い福建省では、宗教政策の落ち着いた直後の一九八二年、僧尼の数は、三八〇〇余人にのぼった。その中のかなりの部分は文革後期に出家した青年僧尼であった。

このほか仏学院に進むことを望んだり、僧尼の養成班で学ぶ青年もまた少なくない。たとえばある地で仏学院が創られるというニュースが一たび伝えられると、たちまち注目を集め、多くの人が、手紙で仏学院の性格や募集条件を問い合わせてきた。わずか数箇月の間に、全国各地から寄せられた、仏学院に進んで勉強するのを望んだり、出家したいという手紙は二〇〇通近くに及んだ。その中には女性がいたり、はなはだしいのは在校中の中高生までもいた。彼らは手紙の中で「職業としての僧侶をとても羨慕しており、ぜひ敬虔な仏教徒になることを望んでいる」と言い、またある者は「人生の道を選択するに当たり、私は仏教を信じ高僧を敬う」ことを表明し、仏学院に出願することを「一生を賭けた目標」とまで決心したという。

職業構成からみると、このように出家して僧尼になることを望み、あるいは仏学院に進んで学習することを希望する人間の絶対多数は農村の青年である。これらの青年たちは、皆な「新社会に生れ、陽光のもとで育った」のであるが、それならなんの原因が彼らを仏教への帰依に走らせるのか。仏教はどうして彼らに対してもうこのような吸引力をもつてゐるのであろうか。その結果、彼らはどうして肉親と分かれ家庭を離れ、青灯古仏に向つて晨鐘暮鼓の生活を願つたのであろうか。このことを知るために、我々上海社会科学院宗教研究所の一部の同志は、一九八二年以来、各地の各レベルの宗教事務部門の支持と佛教界の人々の助けと協力のもと、江蘇、浙江、福建などの地において、一部の寺院の青年僧および仏学院の僧尼養成所の学生に対し

て調査を行い、彼らの信仰の原因を探り、いささか初步的な分析を行つたのである。

一、宗教的家庭の影響

家庭の構成員から、仏教信仰の影響を受け、仏を信じるようになる、これは一部の青年の信仰の重要な要因となつてゐる。仏教は我国にあつては、悠久な歴史と広範な社会的影響力を持つてゐる。解放後、社会は天地をひっくりかえしたような変化をみせたが、しかしいデオロギーの一つとしての宗教思想と宗教意識は、長く社会の中で存在し、人々の思想に影響を与えてゐる。特に旧社会を過ごしてきた篤信の老人の場合、彼らの菩薩に対する信仰は根強いものがあり、一〇年の動乱のあのように災難も、彼らに信仰を捨てさせられなかつたのである。これらの人々の宗教信仰は、その時々さまざまな方法で、いつも周囲の人々、とくにその親族に影響を与えたのである。たとえば湖北省のある地の一七歳の青年によれば、子供のころいつも祖父が昔話を話すのを聞いていた。祖父は仏教徒であったから、いくつかの仏教の昔話を話すのが得意であった。そのため、彼は幼くして修行僧になりたいと想つた。時がたち彼も成長したが、仏教に対する信仰はますます深いものとなり、ついに彼は仏学院で学習することを求め、青年僧になることを志したのである。また湖南省のある地の青年は「両親が生きていた時、二人は忠実な仏教信者であった。父母の仏教信仰の影響で、私は幼年から仏教を学んで僧になろうと決心し、いつも父母に従つて経を学び、念佛していた」という。父母の仏教思想の影響を受けることにより、仏教信仰が彼の幼なき心に根を下したのである。彼は現在の仕事を捨ててでも仏学院に進むことを願つてゐる。江西省のある地の、中学を卒業した青年は、仏教的な家庭の出身で、祖父をはじめとして家中の人は皆な精進を食べた。父母は帰依の弟子で、毎日朝と晩に読経念佛をした。彼は幼い頃ベッドに寝ていながら、父母の行動を見ており耳目に親しんでいたから、次第に仏教に好意を持つようになつてきた。一〇歳前後の頃には父母の指導で簡単なお経を誦めるようになった。彼の父の帰依したときの法師が、いつも彼に仏教のことを教えたのでついに彼は出家して青年僧になつたのである。

また若干の青年は、家の父母や親族が出家して僧尼となつてゐることもあり、彼らが受けた宗教的な影響は、より以上に直接的である。寧夏の一青年は、母親が一九六一年に出家し、兄も一九七五年に出家した。彼は寺に行つて母や兄に会つてゐるうちに、彼らの影響を受け、ついに彼自身も出家したのである。このような多くの例は、家庭で信仰を持つ老人や、親しい友

人の影響を受けることが、多くの青年の信仰の重高な原因の一つであることを示している。さる仏学養成所の一〇〇余人の僧尼の中で、半数以上は、家庭や親友に仏教を信仰する人がいてその影響を受けている。ある者は家の全員が出家し、ある者は兄弟数人が出家し、またある者は幼い時から寺にあって成長し、仏教の薰陶を受けて育ち、成長して後、正式に出家している。

一般に言えるのは、これらの青年信徒の宗教信仰はとても虔誠で、宗教に対する知識もかなり豊富である。このような青年仏教徒があるがままの青年教徒の主流である。したがってこれらの青年を、どうやって団結させ援助し、彼らにしつかりした愛国思想を樹立させ、その積極性を發揮させて四化建設のために自分の力を出させるかということが重要な問題となる。

二、仏教文化や文芸作品の影響を受けたこと

宗教文化は民族の文化の一部分である。仏教は我国で悠久な歴史をもち、その文化の中に保存しているものに我国民族の優秀な文化の結晶がある。仏教の哲学思想の発展は我国の思想史を豊かなものとし、建築、美術、音楽などをふくめた仏教藝術は、今に至っても燐然とした輝きを放っている。当然ながら仏教文化もまた若干の青年に対して吸引力を持ち、彼らが次第に仏教に対して興味を持つようにさせており、ついには信仰の道へと至らせている。

たとえばある工場の、かつては優秀な団員であり、先進的な青年労働者と評価されていた一青年は、文学や芸術を好み、それから仏教文化に興味を抱いた。のちに彼は手紙を書いて仏学院に進んで勉強することを望んだ。彼は手紙の中で、彼が仏学院への入学を希望するのは、仏教が好きだからであり、仏法の内容を研究しその奥義を究めて、文化學術上の価値に及ぶことを願ったからであるといつてゐる。

別の農場の青年労働者は「仏学と祖国の古代医学、建築、武術、書法は同じように、すべて祖国の輝かしい文化遺産の一部であり、どうしても後継者が必要である。私はまだ若いからいろいろなことを学ぶことができる」と考え、そこで彼は仏学院への進学を望んだのである。

また無錫のある二〇余歳の青年は「私は我国の古代の文学作品を愛読しており、哲学、論理、文学、書法、絵画、武術などが好きである。私は仏教の經卷の中に多くの我国古代文化の精華があることを知った。人手不足など各種の条件により、これ

ら大切な文化資料は、今まで適切な処置をとられずにきた」と述べている。そのためには仏学院で学ぶことを願い、関係知識を得た後、この方面の仕事に従事したいと考えた。

このような考え方を持つ青年を見ていくと、多くはある程度の文化水準をもち、かなり勉強が好きである。彼らは我国の優秀な文化遺産を継承することを希望し、理想と抱負を持っている。ただし彼らが仏学院に進学するのを望むのは、さらなる勉強と深い造詣を得る機会のためである。だから彼らの宗教信仰の虔誠の程度は、家庭の影響を受けて出家した青年ほどではないし、またおおよそ長期の出家の思想的な準備にも欠けている。

また若干の青年は、新聞や、雑誌、文芸作品を通して仏教に触れ、それから興味を持ったことがしられる。

湖北の一七歳の高校の生徒は言う「僕は、映画や本や新聞で、時たま寺や僧侶を見る以外、本物の寺や僧侶を見たことがなかった。しかし僕は、いくつかの本の中で、寺の僧達が、祖国と人民の利益のために暴力を畏れず、その身を挺し反動的支配者と、不撓不屈の闘争を戦つたことを知った。極端な場合、その尊い命まで捧げたのである。映画『少林寺』は、このような例を挙げたものである」と。

広東のある寺の青年学僧は、初め小説の中で仏教に触れたが、後にはさらに進んで、いくつかの仏教の因果応報に関する書をみ、仏教に興味を抱き、ついに出家の決心をしたのである。一八歳のとき父母は、彼に結婚させようとしたが、彼はそれを望まず、後ひたすら精進を食べ仏を信じ、ついに出家して僧になつたのである。

四川のある寺の青年僧は、小さい時から神話小説を好んだが、これらの小説の中に多くの因果応報、輪回転生などの仏教思想があり、のちにいくつかの仏教書籍をみ、さらにその上に家庭の影響もあって、次第に仏教の教義が人生と宇宙について深く論じ、きちんとした道理を持つことを知つて、仏教を信仰し出家して僧となつたのである。

以上から次のような情況が知りうる。仏学院や養成所で学ぶことを望み、あるいは寺に入る青年のすべてが、必ず宗教信仰者とは限らないということである。その中の相当な数の人は、好奇心によつて今までつきり分らなかつたものを知りたがつただけなのである。ある青年は、知識を求めるという強い願望によつて宗教に接触したのであり、したがつて我々、思想工作に携わる同志、特に若者の思想工作に携わる同志は、なにも若者が寺や教会に行くと宗教と接觸があるということで、神経質になつたり偏見を生じたりする必要はない。むしろ彼らの動機を分析して、青年を正確な宗教への認識と対処に導くことの

ほうが重要となろう。そうすれば党の宗教政策の落ち着きと社会主義の事業に有利になろう。

このほか、いかにしてその歴史、思想、文化と現状などの各方面を包括した宗教研究を強固なものとするか、いかに青年の間に若干の宗教に対する知識を普及して、青年を宗教への正確な認識と対応に導くかがある。これらはすべて私たちが重視するに値する問題である。

宗教はとても複雑なる社会現象であり、それはさまざまな原因によつており、また人によつて幾重ものカーテンをかけられているから、ひたすら神秘の色彩を帯びることになる。現在、一部の大学生をふくむ大多数の青年は、皆な宗教についての知識が極端に乏しい。さる大学が、かつて一部の学生に対して一つの調査を行つたが、多数の学生は宗教のことを何も知らず、ある者は「知つてもわざか」「漠然と」などと言つてゐる。青年は、旺盛な知識欲があり、ある青年は宗教を知りたいと思ひ、宗教についての知識を得たいと希望しているが、これは正常なことである。遺憾ながら、彼らの望みは満足を得られないでおり、ある者は道端の噂ばなしで、ある者はいくつかの文艺作品によつて宗教を知り判断している。ある者は、身を転じて宗教団体に求め寺に足を運んでいる。したがつて適当に宗教についての知識を普及させ、实事求是によつて、宗教の歴史と文化を紹介することは、青年が宗教を正しく認識することを助け、また党の宗教政策の貫徹を確実なものにする上で有利となるであろう。たとえばさる大学は、歴史唯物主義の課程の中に宗教の特別テーマを設け、多くの学生が、テーマの紹介を聴講の後、わずかながら彼らの知識の上の空白を補つたことを知つたのである。

ある学生はこの特別テーマを通して「私は、十分に宗教の発生、性質、その規律などについて知らされた」「私たちは、宗教に対して、初步的ながらはつきりと理解したし、党の宗教政策が本当に理解できた」と述べたのである。

三、消極や厭世が、仏教中に救いを求めさせようとする

社会主義社会では搾取圧迫はなくなり、宗教が存在する階級的な根源もすでに基本的には消失している。しかし現実の社会にはまだ多くの矛盾が存在し、当事者にさまざまに迷いや苦難をもたらしている。個人について言うなら、長い人生というこの旅において、常づねさまざまに思い通りにならぬことに出会う。どうやってこの矛盾に対応するか、各人の対応は一様ではなく、ある人は困難を乗り越えて生活の中で強き者となり、ある者は自信を失い、ある者は挫折して勇気を失い、現実の生活

と対決せず宗教に転向し、宗教の中に心の安らぎを得ようとしている。

私たちの調査情況によつて見るなら、これら青年が宗教に向う要因として社会と個人の心理の面から見ると、以下の数種が考えられる。

（1）恋愛と結婚の問題

恋愛と結婚は青年にとつて大事なことである。本当の愛情と申し分のない結婚は、人間の生活をさらに幸福なものとする。しかし失恋と、意に添わない結婚は、人に尽きることのない悩みと大きな苦しみを与える。どうしたら愛情のキズに対応できるか。意志の強い人は苦しみを心の奥にしまって、心情を事業などの領域に転じることができ。しかし一部の青年は、恋愛を人生のすべてとして、一旦失恋すると生活の道を見つけることができず、人生に意味がないとしてしまうのである。

たとえばある地の青年は幼くして母を失い、中学の時ある女学生と知りあつた。長い間の交際して姉弟のようであり、いつしか相愛の心が育まれた。後にその女性が、別の人には嫁いだために、彼はショックを受け「青春はもはや私にとつてすでになんの意味もない」と思い、出家の心を起したのである。

また江蘇省の二〇余歳の青年は、失恋による心の痛みと傷を癒す中で、愛情の裏にはまた愁いや悲しみがあることを知らず、運命と戦う勇気がなくなってしまい、出家の望みを抱いた。彼は言う「結婚や恋愛はその場がぎりだ。再び心に傷を負いたくない。新しい生活を求めて寺に入つて僧になる」と。彼は失恋の苦しみを脱け出したが、かえつてこのような一種の逃避と再び別のものに恋をする道を選んだのである。

（2）進学と就職の問題

大学に進学することは多くの青年の希望と理想である。本当に大学に進学できて、深い研究の機会を得、さらに多くの知識をつかみ、国家と人々のために貢献することは素晴らしいことである。しかしそれ深いものを学習するには、必ずしも学校の中だけで進むことではない。かりに大学に進学しなくて、平凡な仕事に就いたとしても、同じように人々のために貢献できるのである。しかし青年によつては、大学の入試に落第して二度と回復できなかつたり、あるいは仕事がうまく行かなくて、人生に意味がないと思つたりしてしまう者もある。

たとえばある青年は、高校を卒業して後、二度の大学入試に失敗し、仕事を待つて家に居たが、心の中では苦悶して、最後

に一転して宗教に助けを求めたのである。彼は言う「優れた社会主義の制度もとうとう私の運命を救つてはくれなかつた。私は、世俗のことを看破して本当に欲望を持たず、一人の人として静かな生活を送りたい」と述べた。

四川のある寺の青年僧は、高校を卒業して大学受験に失敗してから、心にショックを受け、仕事に就いたもののすべて心にかなわなかつた。彼は言う「年の若い人は、みな人を驚かすような業績を成し遂げたいと希望する。しかし他人が大学に進学し、自分ができなかつたことで、心のよすがを失つた、もはや仏門の道を歩むだけだ。そこで家を出て寺に入った」と。

別の一青年は、もとは大都会の学生であつたが、高校卒業の後、農村に下つて生産隊に長年勤め、のちに鉱山で仕事をしたが、労働はつらく仕事の条件も悪かつた。共に生産隊にやつてきた同級生も、ある者は都會へ帰り、ある者は進学したのを見て、人の運命の同じでないことに感慨を催すのであつた。その上、母が死んで、家庭の暖かさもなく、人生のすぎまじさを感じ、心は鬱積し、世俗のことを看破して寺に来て出家を望んだのである。

(3) 環境と心理の問題

人の生活環境も宗教心理の発生と形成に確かに大きな影響をもつ。特に普段の性格が、内向的な青年は、一旦周囲の環境に適応できないと感じると、厭世の考えを抱くようになる。

ある農村の青年は、父の職業を継ぐために都會に来て仕事に就いた。しかし彼は一人ポッチで親しい者もなかつた。「初めは社会の味と世渡りの難しさを知ろうと思った」。都會には高いビルと広い道があるが、広大な故郷から来た農村の青年にとつては「一丈真四角もない狭い部屋に住み、足の踏み場もなく、カゴのなかで煎られて、いるように思えた」。さらにこの朴訥な農村の青年は「お互いに権謀術策を戦わせたり、私利私欲を謀つたりすることに慣れておらず、その上、周りの凡夫や俗婦と付き合つて自分の高潔な人格を汚したくなかった」という。かくして彼は「あらゆる計らいがなくなり、静かに修行して身を終わり、仏門の香火を盛んにするため、自分を一本の線香とし、その燃え尽きることくありたいと願つた」という。

またある工場の青年労働者は「自分は弱き者であり」また「政治運動の犠牲者」で「上司の権力争いの通気孔」だと考え、

その結果、自信を失い、長い間いろいろ考えた結果、ついにそれらを世俗のことと看破したのである。彼は「出家修行、寄託精神」をもつて帰るべき家、唯一の道とし、「人の世の煩惱を洗い流す」ことを求めたのである。

また純粹に心理的原因によつて宗教を信ずる者もあり、これは若い女性に多い。彼女たちの多くは内向的で孤独であり、一

人で静かに居ることを好んでいる。

大都市で生活しているある女性は、自分の性格からして、静かな生活環境と清らかな心境が大好きで、にぎやかな都市の生活の雰囲気に馴染めず、「急いで避難の場所を求めた」という。彼女は仏教の信仰を、現実の生活から逃げる「避難所」とし、仏門に帰依して一生を結ることを最大の願望とすることを表明した。

また書道や絵画、音楽の好きな一女性は「これらは私の思想の虚しさを補うことはできない」と知り、あらゆる物事に興味を失い、清浄な生活と世の中と離れた生活を求めた。だから出家して尼になるのが「生きている上でたった一つの願い」だとしている。

これらの事実は、物質生活の豊かさと精神生活の充実とは同じでないことを示している。社会主義物質文明の建設は、同時に精神文明の建設にも十分に意を払わなくてはならない。しかもその精神文明は、また豊富で多層なのである。世の中とうまくいかずに、精神に虚しさを感じている青年に対して、いかに関心を寄せ、彼らを保護し、積極的にその特長にかなつた活動を開いて、彼らの思想文化の水準を高からしめ、その精神生活の内容を充実させるべきか、これらはすべて意を注ぐに値するものと言えよう。

以上挙げたところのいくつかの方面が、青年を消極的かつ厭世とする主要な原因である。これら信仰を持つ青年に対してどうやって教えていくか。これはひいては年若い愛国の宗教界の人々を、どうやって教育するかという問題に及ぶ。現在の各宗教の愛国者たちは大多数が、新旧社会の変化に強く感ずるところがあり、同時にやや長期にわたる愛国主義の教育を受けたために、深い愛国主義の基盤を持っている。どのような情況の下にあっても、愛国愛教の方向を堅持していることは、論ずるまでもない。しかし目の前の前の信仰を持つ青年の実際の情況からすれば、彼らの中には現実の生活の中で遭遇するさまざまな挫折によつて、宗教へ転ずるものが少なくない。その中には世の中に不満を持ち、現実から逃避しようとする者もある。これらの青年に対して、愛国と愛教が一つになつた教育をなし、そこから愛国愛教の青年を選抜していくことは困難であり大きな任務である。適当なやりかたでこの問題を解決することは、今後の我国の宗教界が愛国愛教の道をしっかりと歩む上に、重大な影響を与えることができよう。

四、宿命論と迷信思想の影響

宿命論の思想が漢民族のなかに流傳してすでに久しい。いわゆる「命中有時終須有、命中無時莫強求」「生死由命、富貴在天」などなどであり、およそ女子供でさえも皆な知るところである。こんなことが新中國の青年世代において、まだ影響があり、「ぜひとも信じなければならぬが、すべて信じることはできない」人がまだたくさんいるのである。

福建省のある県に一軒の家があつたが、算命先生が、彼らは出家することが運命で決っていると言うのを聞いて、これを信じ、夫妻は子供一人とともに出家してしまった。また二〇余歳の青年は、これも出家の運命にあるとされて、その結果、妻を再婚させて、家具を売り払い、自分は出家してしまった。きちんとした一家はかく分散してしまったのである。

また若干の青年は、仏教を信仰したが、明らかに荒唐無稽な、怪しげなものをやつてているのである。たとえばある仏学院が学生募集をしたところ、ある青年は自分を僧尼の生れ変りであるとし、あるいは觀音の生れ変りだから出家したいという者がやつて来たことがある。ある者は「閉門して仏を信じ」自ら「幻覺がある」と言い、だから特にやつて来て「点悟」を求めるというのである。ある者は、もともとさる山の「仙宮」で「香灯を護っていた」が、その地の公安部門が禁止したので、峨眉山へ行つて「修身煉道」するか、仏学院に入つて「修煉」しようと思つたという。

江西のある地の二人の青年学僧は、一人の「干娘」を師として挙げ、出家したという。この「干娘」というのは神秘でよく分らないが、これは火を通したものを食べず、果物や水を飲むだけで生きていたという。ふだんは人相を見、算命をし、氣色を見、病気を直して金を得ていたというから、實際は巫婆と同じようなものであろう。

さらにはなはだしきに至つては、ある青年のように「神を探して人々の心に注ぎ込み、人の心の美を引き出したい」と述べるような者までいる。これら「篤信」の仏教青年の思想と、伝統的仏教教義とは、すでにかけ離れている。

これらの青年の多くは、農村や山間部など、文化の比較的遅れた地区の出身で、本人の文化程度もまた低いために、容易に迷信思想に惑わされてしまうのである。このほか、彼らが仏教について知るところは少なく、また宗教と迷信の間の区別も知らないのである。

事実は、私たちに訴えかける。これらの青少年の教育こそ根本から始めなくてはならないと。すなわち文化知識、自然科学

知識の教育を強め、迷信を排除し、弁証法的唯物主義を宣伝し、彼らが正しい人生観を樹立できるよう助けなくてはならない。

そのほか党の宗教政策を実行することを貫徹するとともに、また宗教と迷信の間の区別の宣伝を強め、青年が正しい宗教活動と迷信の違法活動を区別する能力を高め、人々の身体と心の健康を損なう迷信や違法行為を取り締まることも必要である。これらはすべて非常に重要な仕事である。

五、その他

以上のいくつかの原因のほか、まだある一部の青年のようにさまざまな別の目的があつて、仏教を信仰するものもある。

たとえばある青年は、大和尚がもてて、出国できるのを知つて、仏学院に進んだり、あるいは僧尼養成所で学習することを希望している。ある者は出家を踏み台にして、戸籍を農村から都會へ移し、勤務地の問題を解決しようといふのである。またある青年は、明からさまに「私が出家して勉強しているのは金のためだ」と言う。またある農村青年は、家で仕事をするのが好きにならず、都會へ出て生活するために出家に名をかりて、大都會の寺に入つてしまらく辛抱して物見遊山をし、視野を広げるつもりだという。福建省にもこのような青年がいる。彼らはまず故郷の小寺で出家し、後に福州へ出たり、アモイへ行ったり、普陀へ渡つたりなどして、各名山大刹を一巡りし、生活しやすいところでは一段と長く留まり、生活しづらければ去る。これらの人について真面目な宗教信仰を談する必要などない。ただこれは文字通り「仏に頼つて生活している」だけだ。

またごく少数の人だが、社会で悪事を働き、家に居ることができず、法律の制裁を避けて身を寺に投じて出家する者もある。この種の人は極めて少ないが、しかかつてはあつたのである。

このようにさまざま目的を持って仏教を信ずる青年たちは、皆な本当の宗教信仰を持つてはいないのである。彼らは目的を達成するために、しばらくその身を寺に寄せて いるだけであるから、一旦目的を達成したり、あるいは目的が達成しえないことがはつきりすると、皆な躊躇動搖を表わす。もちろん彼らが仏教を知つての後に、初めの志を変えて、仏教の信徒となることもまた可能である。

以上、情況を分析しきつたことから、青年の仏教信仰の原因是多種多様で、彼ら自身の経歴、生活環境、個人の文化素質が

異なることが、彼らの信仰の程度を多様にしていることを決定している。社会主義社会の中でも、宗教は長期に存在する社会現象であり、一つのイデオロギーとなつていて、それは旧社会からきた人に影響を与えていたり、新社会で成長した一部の青年にも同じように影響を与えていたり。これらの信仰を持つ青年は各宗教の基本的信仰者となり、これにより彼らの生活情況、思想の変化、信仰の原因と目的、さらに彼らの社会と宗教内における活動などは、今後の宗教の発展や変化と密接な関係を持つことは疑いない。この一点をゆるがせにすれば我々の今後の工作はうまくやかなくなるにちがいない。